

第4回 被災地に学ぶ会

「被災地という場をお借りして

人としての生き方を学ぶ会」

活動報告



石巻市立鹿妻小学校・鮎川（牡鹿半島）

2011.9.22－9.25

【第4回 被災地に学ぶ会 行程表】

9月22日(木)	18:30	JR尼崎駅 南側バスロータリー 受付
		※満席の為、必要なもの以外の荷物はバストラックへ入れてください。
	19:00	バス発車 → 自己紹介
	20:30	滋賀県多賀SA(20分休憩) = 滋賀(2名)・京都(1名)・福井(1名)合流
		※途中約2時間～3時間おきにトイレ休憩(各15分間)
		※バス内で活動報告(金大竜先生)+震災関係のDVD鑑賞
23日(金)	2:00	北陸道「栄PA」(新潟)にて長野県から(1名)合流
	8:30	石巻市立鹿妻小学校到着 → 牡鹿ボランティアセンターへ向けて出発
	9:30	牡鹿ボランティアセンター到着 → 活動開始
	15:00	牡鹿での活動終了
	15:30	バス出発
	16:30	大川小学校到着→ご冥福をお祈りする
	17:45	出発
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食
	19:30	出発
	20:00	鹿妻小学校到着
	21:00	消灯
	21:00	浅野さん(避難所リーダー)の講話
	22:30	就寝
24日(土)	6:00	起床 → 朝食は各自で
	7:30	牡鹿ボランティアセンターへ向けて出発
	8:30	牡鹿ボランティアセンター到着 → 活動開始
	15:00	活動終了
	15:30	バス出発
	16:30	鹿妻小学校にバス到着→ご挨拶・記念写真
	17:30	鹿妻小学校を出発
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食
	20:00	バス出発(帰路)
25日(日)	9:00	JR尼崎到着 解散

【鹿妻小学校での活動チーム 行程表】							
23日(金)	8:30	荷物を持って体育館へ→ミーティング(活動内容確認)					
	9:00	それぞれのチームに分かれて活動開始					
	12:00	昼食					
	13:00	午後の活動開始					
	16:00	活動終了					
	16:00	鹿妻小学校出発					
	16:30	大川小学校到着→ご冥福をお祈りする					
	17:45	出発					
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食					
	19:30	出発					
	20:00	鹿妻小学校到着					
	21:00	消灯					
	21:00	浅野さん(避難所リーダー)の講話					
	22:30	就寝					
24日(土)	7:30	校内の草抜き&清掃					
	8:00	それぞれのチームに分かれて活動開始					
	11:30	昼食					
	13:00	午後の活動開始					
	16:00	活動終了					
	16:30	鹿妻小学校にバス到着→ご挨拶・記念写真					
	17:30	鹿妻小学校を出発					
	18:00	道の駅(上品の湯)入浴+夕食					
	20:00	バス出発(帰路)					
25日(日)	9:00	JR尼崎到着 解散					
参加人数	85		教師	25		10代	25
男性	75		一般	7		20代	37
女性	10		大学生	53		30代	6
						40代	9
						50代	5
						60代	3

第四回「被災地に学ぶ会」体験記

★岡山県40代 男性★

このたびは、被災地に学ぶ会に参加させていただき本当にありがとうございました。

お恥ずかしいことではありますが、今回の参加について、ほとんど心の準備をすることもなく、事前に被災地についての現状を調べることもなく、慌ただしく仕事を片付けて電車に飛び乗り、数時間後に尼崎に到着しているという状況でした。

日本を美しくする会の義援金による支援があり、大谷先生をはじめとする被災地に学ぶ会のスタッフのかたの入念な準備や計画に甘え、快く送り出してくれた家族や職場のかたへの感謝の気持ちもなく、ただリュックに自分の荷物と家族が作った千羽鶴を詰め込んだだけの私は尼崎に到着し、参加者の皆さんの表情を見た瞬間に自分の愚かさを痛感するのです。

被災地へ向かうバスの中で語られる仲間の想いを聴くにつれて、ようやく私の心が動きだしたのです。

朝を迎え、バスは石巻市から牡鹿半島へと向かいました。震災から半年経った被災地の姿が目に見え込んできます。撤去された瓦礫が大きな山になっ

ていて、それをじっと見守る家族の姿。なぎ倒されている電柱や樹木。埋もれたままの車。行き交うトラック。墓地には黒く光る新しい墓石が並んでいました。

半年の間、この地でどれだけの人が汗を流し、涙を拭いて過ごして来たのだろうか。ただただ茫然と眺めている私の携帯に家族からのメール。

「気をつけて」「おとうさん、がんばって」もし自分の家族が津波で流され命を失っていたら…言葉にならない感情が込み上げてきました。

牡鹿での活動は、台風の影響による民家裏の土砂崩れの復旧が主な活動でした。なれない肉体労働ですぐに消耗してしまう体力、やがて口数も少なくなり、眉間にシワをよせて土砂と格闘している私がそこにいました。ボランティアとは形ばかりで、ご家族のかたに気を使わせてしまっただけの活動だったのかも知れません。「無理せんね〜」「ありがとうね〜」と声を掛け続けてくださるご家族の言葉に甘え、お餅やおにぎりなどに箸をのぼし、ひとときの団欒になにかしらの自己満足の充実感を感じていたので。

台風の被害で水漏れや断水により、水を自由に使えない生活がそこにあるというのに休憩中には庭の水道で当たり前のように顔をバシバシヤと洗い「よーし、もうひと頑張り」という、なんと迷惑なおめでたい自分だったのでしよう。

夜になり避難所となっている鹿妻小学校の浅野さんの話を聞くことができました。その言葉は今でも重く心に残っています。「人は変わらない。頑張る人は震災前から頑張っている。一時的には緊張感を持って励まし合って、支え合っていたかも知れない。でも環境になればその人の生き方、家族の在り方がそのまま出るので。」その言葉はまるで、私自身に問いかけているようにも感じました。

そして、最も印象に残っているのは夕暮れの大川小学校の光景でした。

子どもたちがいない。子どもたちの声が聞こえない。歌声が響かない。笑い声も泣き声も何もない。薄暗いコンクリートの建物だけがそこにあり、重い空気が私たちから想像する思考すら奪っていくようでした。私はその建物から、学校であったというイメージを想像することは出来ませんでした。

バスへ戻る途中に地元の方が私に声を掛けてくれました。何も尋ねなくてもその方は当時の状況を淡々と説明してくれました。何も言えない私は、ただ学校を見つめながら頷くことしか出来ませんでした。

子どもたちがいること。歌声が響くこと。笑い声や泣き声が聞こえる。指導できる子どもがいる。支援できる子どもがいる。悩んでもいい。怒って

もいい。泣いても叫んでもいい。生きているんだから。ただそのことを胸の奥で大切にしておきたいと感じました。

すべての活動を終え自宅に戻った私をとびきの笑顔で迎えてくれた家族。自分の愚かさを浮き彫りにされた私に対して、何か凄いことを成し遂げたようなまなざしで向かえる娘たち。

改めて「被災地という場をお借りして、人としての生き方を学ぶ」ということを考えたときに、学ばせていただいたというより、自分の未熟さに気がつくことしか出来ないのが現状のようです。豊かで満たされた環境で、うまく逃げていたり、気がつかないふりをしていたり、被災地という場所です浮き彫りにされた私の未熟さどう向き合うのが私の宿題のようです。

最後になりますが、皆さんと過ごした時間は最高に楽しかったです。また会いたいです。

★★長野県40代 男性★★

第四回震災に学ぶ会に参加させていただきまして誠にありがとうございました。私は長野からの参加ということで、大阪からのバスに便乗させていただくことが可能なかの長く考えていました。そのような中、大谷先生の「心意気次第でどうのようにもなります」という力強い言葉に「家

族の理解も得られ、自分がやりたいと願っているのであるのだから動こう」と決断しました。また、鍵山先生の「やつて後悔することと、やらないで後悔することでは大きな違いがあり、行動を起こさずにする後悔ほど後々大きく尾を引く後悔はありません」という考え方にも触れ、自分の体験から「同じことを繰り返してはいけない」という思いもありました。活動を終えた今の気持ちは「行かせて戴き本当に良かった」という一言に尽きます。

復興活動は参加者の年齢、立場に関係なく、純粹にボランティアに参加させていただこうと考えている方であれば、誰にも多くの感動があり、自分の中に眠っている感性を呼び起こせる機会であり、今後の自分の生き方に一つの道標を与えてくれる機会になるのではと感じています。復興とは「物の復興」ということだけでなく、人が忘れてちな「心の復興」（考え方、感じ方）ということもあるのではないかと思います。

私は、教師という職業柄今回の活動では、目の前の与えられる活動に「心を込めて全勢力を尽くす」ということともうひとつ、「現地の先生方の思いに気持ちを馳せる」という二つのテーマがありました。今後仕事に活かせるように学ばせて戴こうと思っていました。

現地に向かうバスの中で、松原先生の活動報告

会の様子は、今回の震災で感じたことを教師としてのどのように生徒や周りの職員に伝えていくかという具体的な方法を教えて戴けた学びの場でありました。合唱「あすという日が」「オワリはじまり」の大合唱でこれから始まる支援活動の気構えができました。

初日の活動は、牡鹿ボランティア活動センターの土砂の片づけ。泥まみれになりながら慣れない土嚢の袋に土砂を詰める若い女性の逞しき、大阪産業大学硬式野球部の部員の皆さんの「みなぎるガッツ」に自分の気持ちも引き出されて清々しい気持ちで作業を進めることができました。何と一日の仕事が半日で終わってしまう程のはかどり具合でした。これには「人の力ってすごいな」という感動を覚えました。

しかしその直後昼食時に見た山の斜面の土砂崩れの跡が山のほんの一部分であることを知ると、自然の中に生かされている自分達が本当に小さな存在でその一部の復興に、何人もの人力で何時間もかけてやつと片づくという現実には、自然の恐ろしさを感じた瞬間でもありました。津波のことを考えるとその破壊力の凄まじさ、そして人間の無力さを改めて考えさせられました。

その日の夕方、大川小学校を訪問させて戴き、失われた幼い命に合掌し、やつとご冥福をお祈りできました。失われた命に対して何も言葉があり

ません。ただただその無念さを思いながら手を合
わせるだけです。

私が実際この大川小学校の地形を見て考えた
ことは、「北上川から津波が来ます」と言われた
時、果たしてどこに子供を避難させるかというこ
とです。長い橋がありますが、子供達を連れてこ
の橋を渡る勇気を正直言って持てません。裏山に
は土砂崩れを防ぐために作られたコンクリート
の岩壁、そして原生林。小学生を連れて登ること
はできません。

「それではどこに？」残念ながらこの訪問した
時間内にその避難方法を私には見つけることが
できませんでした。悲しい現実でした。

夜は避難所ボランテイアリーダーの浅野さんのお話を戴きました。避難所で被災者の方々の生活を守り作ってきたその苦労は計り知れないものがあつたかと思えます。理解を示してくれる方ばかりではないと思えます。どちらかという慣れない集団生活で自由のきかないことに対する不満の声が多かつたのではと推察致します。その中先頭に立たれて頑張つてこられた浅野さんの勇氣と行動力に頭が下がりました。「人はどんな状況になつても変わらない」日常生活の中での心の持ち方や過ごし方がいかに大切かを教えて戴いた一言でした。

二日目はいよいよ浅野さんの「避難所をお借り

した以前よりもきれいにして、子供の体育館としてお返しする」という夢実現の日です。これには士気が上がりました。この状況下で浅野さんの夢の私欲のない大きな志が自分の心の琴線に触れた思いでした。こと更燃えました。浅野さんの思いと「心ひとつに」です。ただただきれいにするのは、心強い応援として日本美しくする会の東京支部の方々も駆け付けて戴きました。

畳みの天日干し、床磨き、窓ふき何でも磨き上げる気持ちで取り組みました。

最後のお別れの挨拶の時の浅野さんの詰まる声と涙にこの活動の報酬を十分に戴いた思いがしました。大谷先生のかけ声と共に行われた感動の胸上げに思わず自分も涙しました。

また避難所の方々の温かな笑顔とお話しの中に入らせて戴きながら、本当に来て良かったという幸せを味わうこともできました。何物にも代えられない貴重な体験と感動がここにはありました。

復興支援活動はこれで終わりでない。今後避難所から仮説に移られた方々との交流もそうです。自分のできることを見つけこれからも復興支援活動に参加させて戴きたいと思つていきます。

末筆ながら今回の学ぶ会の参加につきまして、大谷先生を始めとするスタッフの皆さん、高速バス運転士井上さん、安井さん、避難所リーダーの浅野さん避難所生活を送られています皆様、そし

て共に学ばせていただきました多くの参加者の皆さんの温かなご配慮やお気持ちに支えていただきながら支援活動をさせて戴きましたことに深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

★京都府40代 女性★

今回ご縁をいただき、初めて被災地学ぶ会に参加させていただきました。京都の掃除に学ぶ会からの参加は私一人ということで、少し緊張して参りました。

約十四時間の移動後、最初の牡鹿町での活動は、台風十五号の被害による土砂崩れの復旧作業でした。女の私にどこまでできるかしら、と一瞬思いましたが、大谷先生の「とにかく丁寧。どんな仕事も喜んで。」を思い出して、粘調質の土砂を土嚢に詰めていきました。学生さんのパワーも、とても力強かったです。

午後からはガソリンスタンドの瓦礫撤去をさせていただきました。こども、津波の被害からようやく再開のめどが立ちかけた矢先に、台風の被害にあわれて途方にくれていたとのことでした。皆さんの細かな気付きと動きで、泥が詰まった排水のところまで、丁寧に掃除ができました。スタンドの方は大層喜ばれ、澄んだ青空の下で、感謝の思いで一杯になりました。

また大川小学校では、今回の台風の影響もあるのか、周囲は水浸しでした。ここで起こった地獄のような出来事を想像しきれない自分に腹立たしさを感じながら、小学校を後にしました。

避難所の夜、浅野さんのお話で印象に残った事は、三月十日以前の状態に戻してお返ししたいという深く熱い思いの中、「正直、この立場からやとと抜け出せるかと思うと、明日は待ちに待った日です。」とおっしゃられた言葉に、計り知れないご苦勞をされてきた浅野さんの本音を感じました。また、我々が活動している日本を美しくする会との出逢いの流れをお聞きして、この会を誇りに思っている私達にとっては、この上ない喜びでした。

翌日の避難所大清掃も、雲ひとつない秋晴れでした。大量の畳を干して、叩いて、お約束していた方にお渡しする作業を野球部の学生さんと一緒にさせていただきました。

午後からは、体育館の道具庫を徹底的にお掃除しました。さすが、すぐにリーダーとなり指示して下さる仲間がおられました。とことんやりきるお掃除が出来た後、道具庫にぼつんとお一人で歯ブラシを持ってガラスのガムテープ後をこすっておられる浅野さんがおられました。そのお姿は、震災から今までの思いを込めておられるような、神々しい雰囲気を感じました。声をかけると、「一

緒にやりませんか。」とおっしゃられて、お話ししながら磨きました。その中で、「皆さんは年期的ものの埃を見つけても、迷うことなくすぐに掃除して下さい。何も言葉なくても通じ合い動いて下さる皆さんは、私にとって嬉しくて、ほっとできるんですよ。」と仰ったのが、心に残っています。

また、浅野さんと一緒に、皆さんの満面の笑顔で楽しんだ雑巾レース。最後に浅野さんを胸上げした時の光景。思わず涙ぐんだ私の肩に、そっと手を置いてくれたのは、避難所の方でした。

「あなたが泣くと私まで泣いちゃっちゃうね。枯れるほど泣き尽くしちゃったけど、大丈夫っちゃね。」感無量でした。

最後に、大谷先生が、「それぞれが学ばせていただく陰で、ご迷惑を掛けている人がたくさんいる。そこを申し訳なく思う。」とおっしゃられた言葉にハッとしました。そして、その気持ちをいつも胸に留めて、いきていきたいと思いました。皆様、ご一緒していただきまして、ありがとうございます。

★★大阪府20代 女性★★

私は今回が初めての参加でした。出発前の気持ちとして、不安はなかったです。ただ、「できる

人ができるときにできることをする。最高やんか。」と言って知り合いの方に送りだしてもらったのにも関わらず、正直自分の中では六カ月も経ってから行くことに後ろめたさを感じていました。もちろん、やとと被災地で直接自分の手で何かできることの嬉しさもありました。その二つの気持ちが入り混じった状態で私はバスに乗りました。

失礼な話なのですが便教会の活動に参加したこともなく、どんなことをしているのかも知らなかった私はバスの中で時間が経つにつれて、「なんだかすごいところにきてしまった。」と思っていました。そしてこの方々と一緒にこれから三泊四日過ごすと思うととても気持ちが高ぶりました。

鹿妻小学校に着き、初めて避難所として使われている体育館に入ったとき、私はどんな顔をして入ればいいのか戸惑いました。しかし、段ボールの仕切り越しに避難所の方々がにっこり笑いかけて下さったことで、一気に顔の筋肉が弛みしました。思えばこの時から被災地の方にもらってばかりの二日間が始まっていました。そして何より、今までこの学ぶ会に参加されて鹿妻小学校で活動された方々の行いのおかげで温かく迎え入れてくださったのだと思うとこの時から感謝ばかりの四日間は始まっていました。

活動一日目、私は校庭の草抜きをしました。しばらくすると、この学校の子どもたちも草抜きを手伝いに来てくれました。普通に話をしているのを聞いていると、たわいもない小学生の会話でも楽しそうにみんな笑っていたのですが、一人の女の子がぼそつと「なんか笑ってられる。」と言ったのが私の耳に入ってきました。毎日普通に生活していたらなかなか出ない言葉だと思いません。本当に笑えない時間を過ごしてきたんだなと胸が詰まったのと同時に、今その子が自然に笑うことができているという事実がすごく嬉しかったです。

この日の活動は終わり、大川小学校へ行きました。ニュースでは見ていましたが、まさか自分が訪れてご冥福をお祈りすることができると思いませんでした。バスを降りて歩いて行くと、そこにはただ夕方だからではない暗さと、ただ誰もしゃべっていないからではない静けさがあるように感じました。学校の前に着き、頭の中で子どもたちが元気に走り回っている様子を想像しても、津波が押し寄せてきたことを想像しても、それが全部今自分の目の前に広がっている場所でききていたこととしてどうしても結びつけることができませんでした。慰霊碑の方へ近づいていくと、亡くなった子どもたちや先生方に会ったこともない知りもしなかった私が、いきなり現れて

手を合わせるのには無責任なのではないかという今まで感じたことのない気持ちが出てきました。しかし慰霊碑の前に立つと、「愛する人のところへみんな帰ることができませんように。」とそれまでの迷いを忘れて、ただ祈ることができました。このような機会を与えて下さったことを本当に感謝しております。

夜は浅野さんの話を聞かせて頂くことができました。メディアを通してではなく、実際に体験した方の目線で、声で、その人の目を見て聞くことが本当に大事なことだと思います。自分の目で見て耳で聴いて感じたものしか信じない！なんて意志の固いことは言えませんが、今回の震災の報道などに関わらず、自分の目で見て耳で聴いて感じたことに対してでないと、ああだこうだ文句や意見を言うてはいけないと思いました。消灯後寝袋に入り、どれだけの人がどんな想いで何日もこの天井を見ていたのだろうと思うと目が冴えてしまいました。

活動二日目、牡鹿半島で私はまず台風で浸水した納屋の片づけをしました。野球部の男の子たちもいる中、私は納屋の中で役に立てそうにないなと思い、外に出された物をまとめることにしました。次の日にまた運び易いようにという思いもあったのですが、出された物を見て、もし自分の部屋にあるものがこんな風に外に出ていたら悲し

い気持ちになるだろうなと思えたからです。これも、行きのバスの中などで「ガレキは瓦礫じゃない。どれもその人にとって思い出の詰まったものだから、丁寧に作業してください。」というお話をして下さっていたからできたことだと思いません。よく見るとご飯を炊く大きな釜がたくさんあったので、私は「あのお釜でご飯を炊かれていたんですか？」と聞きました。するとお母さんは「うちが家族が多かったからねえ。」とお話をして下さいました。ある人が「瓦礫は我歴。」と言っていたのですが、本当にそのとき実感しました。そのお家はとても短い時間で終わったのですが、帰り際「お体に気をつけて下さい。」と握手をしたときに、目に涙を浮かべながら「また会えたらいいね。」とおっしゃって下さいました。大したことをしていない私にこんな言葉を下さることが有り難く、また本当にしんどい思いをされたのだろうなと思いました。

次に、先日の台風で流れてきて海沿いの道路を覆ってしまった土砂を除ける作業をしました。スコップで土のう袋に入れて運ぶという力作業だったので、足手まといになりたくない思いと男性陣に負けたくないという思いもあり、張りきってやりました。するとその日の夜に、同じ班だった先生にスコップ捌きを褒めて頂けてとても嬉しかったです。途中から埼玉県からのボランティア

グループの方が二十名ほど合流して、一気に作業がはかどりました。道路が見えたときは、やったと思えました。ただ、その人数をもつてもこの小さな範囲にこれだけの時間がかかるということ、改めて人手の必要性を感じた作業でもあります。二十五日に仮設住宅に引越す方も、家から家具を運ぶのを手伝ってくれる人が見つからないと言っておられて、まだまだやることはあるのに帰らなければならないことにもどかしさを感じました。

今回の三泊四日ではたくさんの人と握手をしました。被災地の方はもちろん、先生方もしつかりとしました。そのどれもが力強く、温かく、私はたくさんエネルギーをもらったように思います。そしてその時の皆さんの顔が忘れられません。私が被災地へ行くことができて様々な衝撃を受けて、こんなに考える機会と人の温かさに触れる機会をつくって下さった全ての方に感謝しています。ありがとうございます。このとても濃い三泊四日を自分の中にしつかり整理して残して、また自分にできることを考えていきたいと思えます。そして是非とも、またこの「被災地に学ぶ会」に参加させて頂きたいと思えます。

本当に、ありがとうございます。

★兵庫県20代 女性★

この三泊四日、貴重な体験をさせて頂き本当にありがとうございます。

「ガレキは瓦礫ではない」「丁寧にしましょう」と先生方から行きのバスの中でお話がありました。私は五月頃、友人と三人で個人的に福島県へ行って被災された方のお家で泥かきやガレキの運び出しなどをさせて頂いた事がありました。その時は、一件のお宅につき20数人のボランティアが一生懸命にそれぞれ自分出来ることをやりました。ただ、今思うと早く片付けよう、一件でも多く、という思いから「丁寧にやる」という大事な部分が抜けてしまっていたかもしれせん。そして今回はとにかく丁寧にしようと思えました。

避難所のリーダーである浅野さんのお話の中で、避難所のトイレ掃除の重要性についてお話されていました。汚い場所はどんどん汚くされる。そして人の気持ちまで汚れてしまうのだと感じました。掃除に学ぶ会の皆さんの「徹底的」な掃除のされ方を見て、今までの掃除に対するイメージが少し変わりました。掃除は「やらなければいけないもの」と思っていました。そうではないような気がしました。体育館の二階の窓と細い通路を掃除していた時、避難所の方が「震災直後は人が溢れてたから体育館のあの上の通路で寝て

たんだよ」と言っておられたのを思い出し、こんな虫のいる埃っぽい所で寝ておられたのかと被災された方の当時の様子を想像しながら、出来る限り綺麗にしたいという気持ちになりました。浅野さんが楽しそうに雑巾がけに参加されていた様子、また掃除が終わって避難所が体育館に戻った時、避難所の子達とバスケットをしている方がいたり、それがとても印象的でした。

そして被災地の方々とお話をさせて頂きました。牡鹿半島で土砂の片付けのお手伝いをさせて頂いたお家の方は色々とお話させて頂いて、お茶やお餅などを出してくださいました。「大丈夫か」とたくさん声もかけて頂きました。大した事が出来なくて申し訳なかったのですが、あったかい気持ちにさせて頂きました。鹿妻小の避難所の方々は震災当日の事も話してください、大変な思いでお家から持って来た昔の写真を見せて下さいました。「あなた達は人生これからだし困難があると思うけど、大丈夫。強く頑張りよ。」と言って下さった方、帰り際「ありがとうございます。気をつけて帰ってね」と言って下さった方もいました。大変なご苦労をされているのに突然来た私にそんな言葉をかけて下さいました。胸がいっぱいになりました。

大きな瓦礫は撤去されてもいまだに手付かずの風景。大川小学校の衝撃的な光景。浅野さんの

から伺ったお話。実際の現場を見たり、被災された方の思いを聴くほど、なんと行って良いのかわからないというのが正直な気持ちでした。でもこの貴重な経験をどうにかして生かさなければと思いました。人に伝えたいと思えました。その為に学び続けたいといけないと分かりました。

三泊四日を通してたくさんの方々に刺激を受け学ばせて頂いたことで、今までの自分への反省点が見えてきました。浅野さんのお話の中の「頑張れる人になるためには普段から頑張らないと頑張れない。人は簡単には変わらない。」という言葉。とてもずしんと心に残っています。私はちよつとやそつと努力では変わらないと思います。でも一つずつ積み重ねて少しでも前進できるようになりたいです。たくさんの方々の力のお陰で、今回被災地で学ばせて頂いた事、本当にありがとうございます。

★★★大阪府50代 男性★★★

「生きることとは諦めないこと」。今回の被災地の学ぶ会に参加させていただいて強く感じました。私自身、今回は四度目の被災地になります。今回、本学野球部員を40名参加させていただいたのも大谷先生はじめ、被災地に思いを馳せておられる方々のお陰であると心より感謝申し上げます。

す。決して私ひとりではどうしようもないことが、こうやって実現できますのも受け入れて頂ける心ある方々がおられるからだと感じます。

そして八月に伺ったとき、半年以上も避難所で被災者の方々のお世話をされている浅野仁美さんのお話を伺い、その献身的に活動をされている姿勢を見て感じたことは、浅野さんも被災者であるのにここまで人のために尽くせる人はいないと感じました。「自分だったら・・・」と考えた時に本当に頭が下がる思いになりました。そして小学生の娘さんも実にしっかりしていました。きつと寂しいこともあるだろうし、話したいことも甘えたい時もあるとは思いますが、お母さんの働く姿を間近で見ているうちに自立していつているのだとも感じました。大人の姿勢、親の姿勢が子供を成長させるのだと浅野さん親子から学ばせて頂きました。浅野さんを拝見していると、私の中で、どこか大阪の釜ヶ崎でボランティア・ケースワーカーをされている入佐明美さんと重なってしまいます。

今回、私自身が一番印象に残ったのが、私たちの前で「この日が来るとは思っていなかった」といつて涙ぐまれた浅野さんの姿を拝見し、人には言えないご苦労、私達では想像すらできない厳しい現実、人間関係、そういったことを一手に背負って生きてこられたのだと強く感じましたし、こ

うやって避難所の方々がここまでこれたのも浅野さんがおられたからだと感じました。「浅野さんが一番しんどい思いをされているから・・・」といつて涙ぐむ避難所の人を見たときに、人を支えるとか、人を救う、人を助けるといふことは軽々しく口で言うものではないと強く思いました。

今回参加するに当たり私の中で気になっていた事がありました。前回に鹿妻小学校で知り合った方がおられます。その方とは、八月に鹿妻小学校の周りの草取りをしていた時に一緒に手伝って頂いたお年寄りの方です。私は、今回この方がおられないことを願っていました。すでに住まわれるところが決まり避難所を出て行かれていますことを願っていたのですが、避難所に着くとまだおられ、最初はどう声をかけていいか分かりませんでした。そして話かけると覚えて頂いておりました。その方は、二十四日の最終日の出発の際にわざわざバスのところまで出てきて頂きました。「また、会いにきますから、お元気で」というと、「もう会えないかもしれない・・・」と言つて涙を流されました。「ここでは会えないかも知れませんが、どこかで会えますよ」と言つと黙つて下を向いてうなずいておられました。

また、今回は、本学の野球部員40名と一緒に参加させていただきました。私自身、最初は自分

が被災地に足を運び出来ることをやらせていただくという考えだけでした。しかし何度か足を運ぶ中で、ひとりでも多くの学生を現地に連れてくることが自分の役目であると気づきました。そんな中、今回一緒に参加の西貝雅裕先生が仙台出身であるというご縁から、二日間に渡って「野球教室」を提案していただきました。20名づつに分かれ、牡鹿半島活動組と野球教室組に分かれての二日間でした。

一日目は、石巻工業高校、古川高校の二校で合同の野球教室を行いました。会場の石巻工業高校は、前回の台風の影響でグラウンドに60センチ水が溜まり、野球が出来る状態ではなかったと伺いました。ボールもその時に水に浸かったそうです。その石巻工業は、我々が大阪に戻った次の日の秋の宮城県大会の準々決勝に勝ち、二十七日の準決勝でも勝って決勝戦に進み、初の東北大会に出場権を獲得されたという嬉しい報告をいただきました。来春につながればと願っております。

二日目の鹿妻小学校での野球教室は、「子鹿クラブ」という小学生の野球チームとの交流を持たせて頂きました。実は、八月の第二回・被災地に学ぶ会に参加した時、鹿妻小学校の校庭で小学生が野球の練習をしていたので帰りのバスの出発までの時間を利用して子供たちの練習を見えました。今回の野球教室をさせて頂いたのが偶然

にもその時のチーム(子鹿クラブ)だったのです。大学生たちも子供たちに教えるというよりも一緒に楽しんでくれておりましたし、子供たちも一生懸命に取り組んでいました。こうやって野球を通して子供たちと関わっている時間は、遠く被災地に来ているという感覚など忘れてしまいうくらい、また初対面でありながら大学生たちは小学生と同じように必死にボールを追いかけていました。小学生時代は、みんなこうやって野球をやっていたのかと思うとどこか懐かしい、素晴らしい空間に感じましたし、時間が許すのであれば、ずっとこのまま好きだけ続けさせてやりたいと思えました。また今回の小学生の野球教室をさせていただくにあたり、三重県の喜田健児先生よりご連絡をいただき、NPO法人「未来の絆」からボールを5ダースご用意いただき、部員の代表者から小学生のキャプテンに贈呈させていただきました。子鹿クラブは、三月の震災の影響で存続もあやぶまれていたようですが、関係者や保護者のご理解・協力で五月より再開することができたと伺い、ボールもすごく喜んでいただきました。遠く離れた地で野球を通して交流を持たせていただけたことは、私にとりましても学生たちにとりましても本当にありがたく、貴重な経験をさせていいただきました。お世話いただきました西貝先生はじめ、石巻工業高校、古川高校関係者、子鹿

クラブ関係者の方々に心より御礼申し上げます。今回二日目の避難所の清掃では、千種敏夫さん、波多野勝彦さんの東京チームとの合同でさせていただきますました。皆さんの手際のよさ、無駄のなさ、そして丁寧さを拝見しており非常に勉強になりましたと共に、志の高さが実際に場の空気を変えるのだということを実感いたしました。浅野さんは常々「避難所になる前の体育館よりもきれいにしてお返したい」という思いをずっともっておられたということも伺っており、このタイミングで東京チームと大阪チームが合同でできたということも導いていただいているのかと感じずにはいられませんでした。

そんな東京チームの中には、香川県から来られた現職の警部でもある國方卓さんが親子で参加されておりました。息子さんも一生懸命に取り組みまれておられ、同じ息子を持つ父親として父親のあり方、親子のあり方を学ばせていただきました。大阪チームの中にも、長野県から合流されました宮本賢一先生がおられました。長野県の先陣を切って参加された先生の勇氣、行動力を拝見して、こういう先人がおられるから長野の教育、若い先生方が今後育っていくのだと強く感じました。そして帰りの道中の高速道路のバス停で、夜中の二時にバスを降りて行かれた宮本先生の後姿に頭が下がる思いでした。

学生たちにとりましても多くの経験をさせて
いただく中で、大川小学校へ足を運んだことは口
では言えない初めての経験だったのではないか
と思います。一人ひとりが祭壇に手を合わせて戻
って来る中には涙ぐんでいる学生もいましたし、
心で感じ、魂で感じるということがこういうこと
だというふうに感じた者もいました。

私自身が一番一緒に来れてよかったと感じた
のは、石巻を離れ大阪に向かう車中、体験発表を
行ったときでした。私自身、一人ひとりがどう感
じたのか、何を得たのか、ということを考えてい
たのですが、学生たちの体験発表を聞いていて、
そんなことはどうでもいい、何を感じたかではな
く、何を心に刻み込めたかが大事だと気づきまし
た。それは、人にどう伝えるかではなく、自分自
身がどのように生きていくかだと強く思いまし
た。私自身もそうですが、震災がなければ学生た
ちも宮城県・石巻にはきつと一生来なかったと思
います。しかし、今回のこういう機会、ご縁とい
うものは、野球で勝った・負けたよりもずっと大
切なことであり、そこには人とかかわり、人と
のつながり、人との絆、人間としての生き様があ
るのです。どのような状況でも「決して諦めるこ
となく生きること」が如何に大切であり、尊いこ
とかということを学ばせていただいた四日間
になりました。

今回尼崎を出発した行ききのバスの中で、DVD
を観た後で金先生から学生たちにお話をいた
きました。その中で、ボランティアで大切なこと
は、「知ること」「少しだけ分けること」「自分
自身を懸命に生きること」という池間先生のお話
がありました。このお話を聞いていて、ボランテ
ィアという枠を超えて、普段からこういう気持ち
で自分自身も生きて行くことが必要なのだと気
づかせていただきました。ボランティアとは単
なる人助けということではなく、活動を通して自分
と向き合い、自分の生き方を見直す場でもあると
強く感じました。そして、これまでの「知覚考動」
ではなく、「知覚動考」（ともかくうごこう）に
していこうという内容のお話は被災地に入る前
に自分と向き合うきっかけになり、金先生のひと
言ひと言はずごく新鮮で、学生たちにとりまして
も心に響く内容でもありました。

今回の四日間で、何人もの学生たちが参加者の
先生方や現地の方々からお声をかけていただき、
お話をさせていただきました。志高い先生方との
ご縁、皆様方の姿勢・実践力は、学生たちの目に
焼きつき、心に響くものであり、自分を見つめ直
すことにもなったと思います。世の中にはこうい
った素晴らしい先生方、思いを行動に変えて動か
れている立派な大人がいるということを感じて
くれたことと思います。

行ききのバスに乗り込む際、京都の大西由香さん
から手さげ袋をいただきました。ずつしりと重い
その中には、今回野球部の学生が参加するという
ことを聞かれて坂本様という方が握っていた
いたおにぎりが入っていました。現地に行かれな
い方がこうやって思いをおにぎりに込めて届け
ていただけたことは学生たちにとりましてもす
ごく力になりましたし、その心の奥にある優しさ
に感動いたしました。改めて、色々な方々の思い、
ご協力があつて自分たちがバスに乗せていただ
いているということ、毎回このような機会を与え
ていただけます「日本を美しくする会」の鍵山秀
三郎先生のご理解、ご協力に感謝申し上げます。
そして強い思い、高い志を持った先生方が同じ方
向に向いて行動を起こすことで、被災地の方々
にも伝わるのだということを変更して強く感じま
した。

避難所のリーダーの浅野さんも話されていま
したが、避難所の人たちは、実は避難所を出てか
らの生活が本当は大変で大事であるというお言
葉。それは我々に取りましてのこれからの活動が
大切だということにも通じるものでもあるよう
に感じました。人間はひとりでは生きていけませ
ん、どんな小さな当たり前にも感謝できないで
いると一見よいことをしているように見えても、
実は人を傷つけることにもなり兼ねません。「自

分はこれだけのことをやったのだから」という思
い上がった考えではなく、常に「くさせていた
だけ」という気持ちで今後も参加させていた
だけだと思います。ありがとうございます。

★★奈良県30代 女性★★

金先生の言葉で言うならば、「知覚動考」とい
う一心で、今回も参加させてくださいとお願いの
メールをしました。でも今回はいつも一緒に
て頂く志乃先生がいらっしゃらないので頼りな
い自分が一人で参加できるのか心配でした。しか
も、出発当日の朝、クラスの子が喧嘩をし、「こ
れは放課後も対応におわれてしまうかもしれないな
い。」と、今回の参加を諦める覚悟をしました。
それぞれの話を聴きっていると、どちらの子も次
第に穏やかになり、お昼までに納得してくれ解
決できました。その時、「行ってきなさい」とい
うことなのかなあと、なんだかその二人に感謝で
いっぱいになりました。行きのバスでそんなお話
を古松先生とでき、二班の移動するバスの中は
ヒサさんの生き方に触れられたり、由香さんが私
に細やかな気配りをして下さったり、下さんの楽
しきで、出発前の心配は嘘のように消えていま
した。

今回参加したいと願った一番の理由は、サエコ

さんと、阿部さんにもう一度お会いしたかったか
らです。何の特技もとれない私を無条件に受
け入れて下さるサエコさんの大きさ、阿部さんの
ぬくもりの中に見え隠れする強さが、一体どこか
らくるのだろう…そう思っ、お会いできること
をととても楽しみにしていました。

一日目の活動は避難所の草引きでした。黙々と

草を引きながらあつという間に一回目の休憩を
しました。その後、作業の前の青空コンサート…
基さんの柔らかい歌声は、つい「黙々と（ひとり
で）してしまう」私の心をとかしてくれました。
それだけではなく、近くにいた小学生の仲良し三
人組とのつながりまでもつくってくれました。

「手伝ってもいいですか。」と三人は声をかけて
くれました。いろんなお話をしてくれました。「わ
あ！ここ、あれ以来登ってないから嬉しいー！」
と駆け上がり、てっぺんの草を集めてくれました。

「あの子の好きな子はねえ、」と恋バナをしてい
たとき、「地震の時こわくて泣いてたら〇〇くん
が大丈夫って言ってくれたんだよね。」とか、「私
の家は近く。」と話していて「全部流されたから
引越したの。」と話す彼女たち。言葉の奥にあ
るこの子たちの心が気になってしまいました。そ
んな思いとは逆に、彼女たちはわたしたちを気遣
い、（気遣うという意識なく気遣ってくれる彼女
たちはいろんなことを“遊び”や“楽しさ”に変

える名人でした。）「ジュースくじするから来て
く。」と言ってジュースを持って来てくれたり、
お昼からも草引きを手伝ってくれたりしました。
その中で、なにより嬉しかったのが「楽しいい
ー！！！」

「いつもの草引きは楽しくないのに、今日は楽し
いよねー！！！」

と言う言葉でした。帰りのバスでも麻里さんが言
っておられたように、「笑っていられるう〜。」
という言葉も、本当に嬉しかったです。「楽しま
せてあげよう」と意気込んだわけでもないし、楽
しむために何かを考えたわけでもないのに、「楽
しい」と感じられたり「笑える」自分に気づき、
それを素直に言葉にできる彼女たちにとっても魅
力を感じました。あんなふうに自分の心に真つす
ぐでいれる彼女たちをととても素敵だなあと感じ
ました。

そんな彼女たちの「友達を一人亡くした。」と
いう言葉をひろわれている夢森先生（彼女たちが
つけてくれたニックネームです）の引き出すか
わりを帰りのバスで知り、私の知らない彼女たち
の素顔を感じました。

二日目の牡鹿半島では、今回の台風の影響で浸
水してしまったお宅のお手伝いでした。そのお宅
のお母さんは「地震では大丈夫だったんだけどね
え。台風でねえ・・・。」

と話して下さいました。胸まで水が来て、その状態で一時間もいてらっしゃったそうでした。ようやく消防隊が救助に来てくれ、ロープを張ってあげてくれたとおっしゃられていました。その時ふと、避難所の朝、大丈夫な家もあるのに、私の所は全部流されて…悔しくて…と話しかけて下さった方のことを思い出しました。どうすることもできない、誰のせいでもない、不安や苛立ちを思うと何とも言えない気持ちになりました。

お昼はおむすびや飲み物、リンゴやなし、煮物や鯨、お漬物まで今ある全てのものを出して下さいているのではないかと思うくらい、ごちそうしてくださいました。こんなときであっても、こうやって大事にして下さることに感謝でいっぱいでした。

ここでのお手伝いは、山形の「日本を美しくする会」の方々と一緒にさせていただきました。丁寧に丁寧に細かいところまでされている背中を見て学ばせていただきました。作業しながらお話しする中で、一回目に向かわせていただいた雄勝町でのことや、バスを出して下さいる会の方々のことを思いました。七月に別のバスで向かったことのある私は、作業場の近くにトイレがなくて当たり前なのだと思いました。でも、雄勝町には七月の時点で仮設トイレがあつて水まで引いて下さり、テントをたてて日陰を作ってくださいっていました。

た。それは、それまでに行かれ、日々丁寧に活動されていた「日本を美しくする会」の方々の姿があつたからなのだと思ひました。そのおかげで今回も行かせて頂けることに感謝でいっぱいです。本当にありがとうございます。

今回、参加された皆様にもとても感謝しています。ありがとうございます。また一緒にできることを楽しみにしています。

そして、教室にいる子たちが大産大の野球部のメンバーのような素敵なチームになれたら…あんなお兄ちゃんたちみたいになれたらなあと思ひました。そのために自分のできることを見つけられたら…と高い高い目標を無謀にもいひたいです。またその秘密を教えて下さい。ありがとうございます。

★★京都府40代 男性★★

今回被災地へは二回目、この会での参加は初めてでした。「被災地という場をお借りして人としての生き方を学ぶ」という言葉、まさにその通りだと感じました。

大谷先生がトイレ掃除やボランティア、一回や二回やつたぐらいではかえって傲慢になる。だから続けなければならない。胸にグサつと来た言葉でした。どこかで「ボランティア」に行つてい

という傲慢さが出ていた気がします。本当の意味で、「させていただき」学ばせていただいた、と言えるよう、日々の自分を戒めねばと感じました。被災地で考えたこと、感じたことで、特に印象に残っているのは三点です。①大川小学校の教員や浅野さんの立場になったときに、自分は果たして何ができるか②被災地の方の受けた衝撃の大きさの再認識③浅野さんの「震災を経験したから」といって、人間が変わるわけではない」ということ

①について、

大川小学校では胸が詰まりました。今でも言葉になりません。初めて現地に行かせてもらひ持っていた印象がまったく変わりました。報道では、「なぜ教師たちは裏山に避難させなかったのか」という非難が主流でした。二次元的な地図を見て私もそう感じていました。でも、現地であの急斜面を見、倒壊した校舎を見、慰霊碑を見、いかに浅薄な非難をしていたか恥ずかしくなりました。当日、そんな生半可ではない逡巡があつたと思ひます。それでも尚、救えなかつた命。もつと、もつと以前の備えが必要だと感じます。翻つて、自分の職場で今何か「災害」が起こつたらどうするか。結局、教員として「判断」を放棄せず、人任せにせず、色々な場面で「責任」を感じながら判断することを習慣にせねばと感じます。浅野さ

んのされていることでもそうです。純粋な「無私」。そんなことが果たして自分にできるか。しょーもない「私利・私欲」が出まいか。怖くなりました。

②について

体育館の泥を落としながら、泥ですらこんなに落ちにくいのに、被災された方の心の「泥」は、簡単に落ちるものではないと、そう感じてしまいました。そう思っ、床に向かわせていただきました。

③について

最も強く心に残りました。「震災があつても人は変わらない」。

震災を経験してそれを生きて乗り越えてこられた方々は、そのことで、「強く・たくましく」なられたと勝手に思っていました。でも、人は「変わらない」。

朝寝坊する子は、避難所でも朝寝坊だし、太って自己管理できない人は、一時期食べるものが無くて痩せたけれど、結局ぶくぶく太って、わがままな人は、わがままのまま。

それまでに頑張っていた人は成長するかもしれないけれど、結局、震災までのプラス面とマイナス面が増幅される！

そう思うと、普段から、今まで以上に、自分と生徒たちに向き合わねばと思えました。

皆さんの発表を聞いていると、「ありがとう」

と本当にたくさん言ってもらった、という感想ばかりでした。また、大谷先生はじめ、日本を美しくする会の方々のバックアップやご配慮、少し気づけた部分だけでも、こんなに凄いことと頭が下がることばかりです。

1人の100歩より、100人の1歩。その通りだと思えます。そして、教師である、自分だからこそできる、伝えられることもあると思います。

私が目の前の生徒たちに語る、伝えることによつて、これからの世代が変わる可能性があるはず。また、生徒の後ろにおられる保護者に、生徒の口から伝えることで、さらに広がる可能性があるのではないのでしょうか。

そのためにも「思っている」だけではなく「行動」が大切と痛感しました。松原先生を見習って、全クラスでこの話をさせていただけます。本当にありがとうございました。

★★★大阪府40代 男性★★★
はじめに

「被災地に学ぶ会」参加させて頂くこと、四回目となります。NPO法人「日本を美しくする会」のご厚意に甘え、皆勤で「学ぶ会」の支援活動に携わらせて頂けることに、心より感謝申し上げます。

私たちのお世話を下さっている大谷育弘先生が帰途のバスで「石巻に行くたびに周囲のご迷惑となるが多くなっている」と仰っていました。ご指摘の通りだと思います。学ばせて頂いてばかりで、被災した方々や「美しくする会」の皆様（義援金を下さった全ての方々も含む）、同志の皆様にもお返しできていません。苛酷なスケジュールでのバス運転をお引き頂いた安井様や井上様にも、満身に謝意を伝えられたとは思えません。まだまだな自分で、本当に申し訳なく思います。

ただ、感想文を書くというこの機会を有難く活かさせて頂き、私が学んで参りましたことをお伝えするという形で、ご厚意のお返しを少しだけさせて頂きたい。

一科目め「被災地域の現地情勢」

三月十一日に東日本大震災が起こり、それから一カ月ほどは仕事も何も手につきませんでした。被災地に果敢に飛び込む若者たちを前に、自分も現地入りすべきかどうかを考えましたが、結局は躊躇して何もできずにおりました。

そんななか、鎌山秀三郎相談役や原田隆史先生、池間哲郎先生、松崎運之助先生をお招きし、チャリティ講演会をさせて頂くこととなりました。私はその催しのお手伝いに、微力ながら打ち込ませ

て頂きました。それが、四月〜六月のことです。しかし、「現地の状況をどうしても生で見たい」という思いは止まず、結局は何の現地支援もできていない自分に地団駄を踏んでいた毎日でした。「美しくする会」と大谷育弘先生の呼びかけにより、「第一回被災地に学ぶ会」の参加者募集が行なわれたのが、ちょうどこの時期でした。私は喜んで参加を申し込み、七月上旬に石巻市雄勝町での遺留品整理と瓦礫処理の活動をさせて頂きました。

真つ二つに折れた電信柱、建物の四階屋上に頭を突っ込んだままの観光バス、家屋が流された荒地に散乱する漁業用の網やブイ、湿ってかびた布団や衣服、真つ黒の水が溜まったままの浴槽、何より強烈な匂いと大量発生したハエ。テレビで見る戦場の光景さながらでした。

第二回の「被災地に学ぶ会」では、宮城県の南東端牡鹿半島で活動をさせて頂きました。「おしかホエールランド」近辺を見渡すと一面が瓦礫の野原でした。八月初旬になっても瓦礫の処理が一向に進んでいないことに驚きました。しかし、現地のボランティアセンターの遠藤太一様によると、それでも瓦礫処理は八〇%終了しているということでした。牡鹿半島に向かう県道二号線のすぐ横は海でしたが、地盤沈下が激しいため、満潮には道が水没しました。

第三回では、牡鹿半島の鮫浦地区を担当させて頂き、今回（第四回）はボランティアセンター近辺の鮎川地区を担当させて頂きました。第四回は、台風によって土砂崩れや床上浸水などの天災を再度こうむったため、まるで「一からやり直し」と言わんばかりに泥出しからお手伝いすることになりました。流されてきた大量の土砂を、屋内や側溝から搬出する作業も行いました。いくら搬出しても、土砂は減らないみたいに見えます。ここでは鍵山相談役の「一つ拾えば一つだけきれいになる」の言葉だけが活動の指針でした。

震災から半年以上経った今でも、人手はまだまだ不足しているのです。

二科目め「心育」

八月初旬の第二回、そして今回九月二十三〜二十四日の第四回被災地に学ぶ会では、鹿妻小学校避難所で一泊お世話になりました。そこでは何名かの避難所暮らしの方とお話をさせて頂きました。今から思えば、どれだけ「上から目線」でお話をしていたのか、恥ずかしくなります。人の「お家」に勝手に上がりこんでおきながら、中腰のままで話しかけ、思い出したくもない震災当時のことを聞き出そうとしたり。それでも、そんな私に珈琲を入れてくれ、他愛のない話をして、和にくわえて頂きました。第四回では、約束した「絵の

具セット」を買い揃えて避難所まで持参し、プレゼントできました。そして、快く受け取って下さったその方は「私、絶対絵を描いて送るからね」と言っておきました。おこがましいことは百も承知ですが、実直な感想を申し上げるならば、鹿妻が第二の故郷のように感じました。

牡鹿半島で今回土石流の処理をさせて頂いた時、そのご自宅の方は終始私たちの活動を気にかけて下さり、手作りのおにぎりやら冷たい飲み物やら、休憩のたびに差し入れて下さいました。震災がなければ市役所や業者などに要請していたであろう泥出しや瓦礫処理。差し入れなさるにしても、近くに店があれば豊富な食材で多彩な食事を用意して下さいたのだろうと思います。しかし、実際はそんな状況にない。食材も何もない。また、そんな経済状況でもないはず。だから、おにぎり一つ。たったおにぎり一つに心をこめて、誠の気持ち伝えて下さるのです。何もなければこそ、今あるものに最大限の誠を注入して下さい。それはおにぎりとかの物品だけでなく、たったひとりの言葉をあつても。目に見えない大切な心そのものを学ばせて頂きました。理屈ではなく、教科書もなく、記憶力を働かせる必要もなく、ただ感じるだけでいい。その誠の気持ちの交歓に感動しました。

今回、また色々とお話させて頂いた避難所の

方々がこうおっしゃっていました。「震災のおかげで楽しい(避難所)生活でした」「色々なことを学べました。若いころはあんまり勉強してこなかったから、こんな歳でも学ばないとね」と。ご縁の有難味というものを噛みしめておられました。古希や喜寿を越えた方々が人生を前向きに捉えようとされるそのお姿。心の中で合掌するほかありません。それこそが私にとって究極の学びでした。

三科目め「同志の学」

この「学ぶ会」に参加される方は、当然ながら何の損得も考えずに、心意気ひとつで参加された方ばかりです。往路のバスで一人ひとりが自己紹介され、復路のバスで感想や反省を述べ合う、これもまた非常に価値のあるものだと思います。

私は毎回石巻入りする際に、自分自身の目標設定をしていきます。今回の目標は「人の思いや祈りを背負って活動する」というものでした。というのも、今回は運動会シーズンと重なっているため、小学校の先生方が公務で参加できないというケースが多く、「私の分まで顔張ってきて下さい」とのお気持ちは何人かの方々から託されていたからです。第三回の「学ぶ会」に参加されていた山路直美先生や永地志乃先生、そして鹿児島にお住まいの堺若竹読書会創設者中島和之様からの

お気持ちを頂いての、今回の石巻入りでした。

「人の思いを背負って活動することとは何か。そんな自問を往路のバスですつととしていたところ、山城大悟様より有難いお話を頂きました。そう。結局は一生懸命目の前のことに取り組むこと以外に答えはないのです。おかげさまで、牡鹿半島ではいつもにもまして、精一杯働かせて頂きました。どれだけ山路先生や永地先生、中島様の思いに応えられたかは自分で全く分かりませんが。また、牡鹿半島で土砂運搬等に大活躍だった大阪産業大学野球部の学生の皆さんからも学ばせて頂きました。何も言わず、「ハイ」のひとりで重い土砂を根気強く運搬されるその姿が十分に学びであり、また感謝するほかありませんでした。老若男女は全く関係なく、学ばせて頂ける同志の方々に本当に感謝いたします。

四科目め「体育・掃除道」

今更ながら申し上げるのも変かもしれませんが、私は大谷育弘先生を心より尊敬しております。大谷先生は人間の「プロ」だからです。人間の「プロ」とは単純なことです。時間を守り、約束を守る、ただそれだけのことです。しかし、それを完璧に成し遂げることの難しさ。少なくとも私にはできていないことばかり。「学ぶ会」の作戦会議等に携わらせて頂き、大谷先生と動きを一緒に

させて頂く中、改めてその偉大さを感じます。

その偉大さと同じオーラを感じるのが、墨武司様や渡部ヒサ様をはじめとする「日本を美しくする会」の重鎮の皆様です。今回、一日目に、体育館のトイレ掃除をお願いしたのですが、何とトイレの窓を枠から外し、窓枠の溝までお掃除されました。使用する道具を終始きつちりと揃え、また終了後にはスポンジやブラシ、金属のヘラなどをキレイにして、天日干しされていました。普通ならば、どこかの過程で妥協が入ってしまうところかと思えます。私心に負けず、やるべき公務をやり切る。それは大谷先生同様に完璧な所作でした。

私心に克って公務をやり遂げる。妥協する心を抑えて、約束を果たし切る。自分の怠け心を押し殺して、人様への誠意を最大限伝える。そういった動きができていくかいないかは、普通に立ち話をしていくだけで分かります。携帯電話を片手に人の話を聞くのか、頬杖をついたり、膝を組んだりしたまま話を聞くのか、ガムや食べものを口に入れたまま話を聞くのか―それとも、腰骨を立てて全身全霊で人様のお話に傾聴するのか。大谷先生や「美しくする会」の皆様に通しているのは、そういった日常の美しくして完璧な所作です。

私心に克って公務をやり遂げる。それは、目の前にある土石流の土砂を運搬する時にも守らな

ければならない戒律です。怠けたい心を放置しておくと、必ず易きに流れてしまいます。「こんな重いものを運搬するより、あっちの掃除を短時間で終えてしまえばいい」などと、少ない労力で見た目の成果が大きそうな対象ばかりを探してしまします。目の前にある本題から逃げ出してしまおうとするのです。

だから、今日は逃げ出してしまおうとする弱い自分と意識的に向き合いました。その際、運搬のパートナーをして頂いたのは光岡智史先生でした。おかげさまで、何とか最低限の公務はできました。これを書かせて頂いている今、すでに筋肉痛です。こうして、掃除道とともに人間学や体育の学びを得ました。大谷先生、墨様、渡部様、平井久造様、光岡先生、有難うございます。

五科目め「リーダー学」

第三回、第四回と「学ぶ会」に参加させて頂いているなか、若い先生方が私のことを「俺の師匠」「リーダー」などと冗談交じりに呼んで下さったり、食事の際にも一緒に下さったりと、身に余る光栄を頂くようになりました。「学ぶ会」に参加させて頂く以前には、このような光栄を経験したことはほぼ皆無でした。私の中の何かが変わったのか。本当に不思議でした。

そして、今回、その疑問に答えが出ました。大

谷先生から、大谷先生の分身としてリーダー役を拝命するケースが私に増えて参りました。今まではなら牡鹿半島行きのバスに乗っても、うたた寝していたり、流れる景色をただ眺めていたり、自分のために時間を使っていました。リーダーともなれば「次の行動で手配すべきことは何か。注意点は何か」「どのタイミングでどんな話を皆様にお伝えするのか」「どうすれば皆様が一番気持ちよく、スムーズに活動できるのか」、そんなことばかり考えて頭が一杯です。自分のための時間を少なくして、公のための時間が増えたこと。これがきつと、身に余る「光栄」の背景にあったものなのだと思われました。

結局、人の話に傾聴することから、ボランテイアのリーダー（トイレ掃除のお掃除リーダーも同じかと思えます）に至るまで、大切なことは人様に誠心誠意尽くすことなのだと思えました。私心を贅肉とするなら、公の心、誠の心は筋肉です。例えるならば、大谷先生や「美しくする会」の重鎮の皆様はボディビルダーのような筋肉隆々の方なのです。とくに渡部様はご年齢や女性であるということとは関係なく、世界レベルのマッチョだと思えました。

リーダーの条件は精神的にマッチョであることだと痛感いたしました。どこまでも人の話に傾聴し、どこまでも疲れ知らずで、どこまでも私心

に妥協せず、率先して仕事を淡々とやり切るとともに、いつも人の「気持ちよさ」や幸せを追求すること。そうすれば、庇護される側からすれば気持ちがよく、付いていきたくなるのも自然なことなのです。

ただ、道理が分かることと自分が実践できていることとは全く違うことです。私自身はまだまだ本物ではありません。簡単に剥がれるメッキだと痛感しております。今回の牡鹿半島の活動でも、若手の鍋田宏祐先生にフォローして頂き、多大なるご迷惑をおかけしました。鍋田先生なくして二日目の牡鹿の活動はなかったことをここに付記させていただきます。有難うございます。

おわりに

このように、長々と書かせて頂きました。現地にお邪魔する度に学びの「科目」がどんどん増えていき、気が付けば五科目にもなっていました。駄文でお目を汚しただけでもありませんが、どうかお許し下さい。

この四回の「学ぶ会」に参加させて頂いて得たことは結局、自分がまだまだだという事実です。とくに、数を重ねていく度に、「学びが多かった」などと申しながら、結局は「知ったかぶり」になっている傲慢な自分と出会うようになってしまいました。無意識のうちに傲慢になってしまっている自分

に気づき、恥ずかしくなって穴に入りたくなくなったことが今回は何回あったでしょうか。まだまだです。これからも学ばせて下さい。長々と申し訳ありませんが、これが精一杯の思いです。お世話になった全ての皆様、本当に有難うございました。(終)

★★大阪府20代 男性★★

現在東大阪市で英語教師、ソフトボール部顧問をしております。今回、わたしは、現地の「人」に学ばせてもらいました。前回は、牡鹿半島の現状を見ることで、人というよりは、地震、津波の恐ろしさを感じ、そこから自分には何ができるのかを考えさせられました。

今回は、初日に。避難所の方たちが生活する体育館の掃除をお手伝いさせていただきました。具体的に、体育館を明け渡す前日の作業として、窓をきれいにしたり、物資の搬入(トイレトペーパー、ランタンなど)をしたりしました。たかが、窓ふきではありませんが、避難所の方たちの思いの詰まった窓であり、鹿妻小学校の子どもたち、先生方の思いの詰まった窓だと思うと、とことんきれいにしたいという気持ちになり、ものすごくやりがいを感じて窓を拭かせていただきました。

夕方には、初めて、現地の子どもたちと触れあ

うことができました。前回参加させてもらったとき、帰りのバスの中で考えていたことがあります。それは、「自分らしく！力になりたい」ということでした。その中で、子どもたちとサッカーしたいと考えておりました。そして、そのチャンスがやってきました。午後の作業もオワリ、鹿妻小学校から約十五分くらいのところにある銭湯に行くときのことです。たまたまバスの発車時刻が予定より三十分ずれました。そのおかげで、三十分のフリータイムができました。そして、チラっと運動場に目をやると小学生の女の子が四人いました。

すぐさま「おい！サッカーせーへん??」と問いかけると

子どもたちは、「いいよ！」と即答でした。さっそくグラウンドに出ました。一分も経たないうちに大人三人対なでしこ四人の試合が始まりました。子どもたちの笑い声が忘れられません。元気に生き抜く子どもたちがありがとうの気持ちでいっぱいになりました。そして、なんと心地良いのでしょうか。あの場面を思い出すとまた心地よくなります。子どもの持つ力って本当にすごいです。避難所でリーダーをされている浅野仁美さんがおっしゃられていました。

「こどもってただそこで笑っているだけで周りが元氣付けられるのです」と。

子どもには、大人の何倍も笑顔に宿る力があるのだと学びました。

その日の夜は、避難所で現地の方と一緒に寝泊りさせていただきました。九時になると消灯し、シーンと静まりかえった体育館で寝袋に入りました。そのとき、わたしが感じたことは、「自分の弱さ」です。震災から半年以上もの間、暑い日も寒い日も毎日毎日乗り越えられてきた現地の人たちのご苦労を思うとともに、自分に同じことができるのかなという弱さを知らされました。

翌朝、起床すると、隣で眠られていたおばあさんが、「おはよう、一緒にコーヒー飲まない?」となんともいえない優しい笑顔でお声をかけてくださいました。その後またくさんの方にお声をかけておられる姿に、頭が下がる一方でした。

二日目の活動は、牡鹿半島での活動でした。先日の台風15号で津波では助かったおうちが、台風による土砂崩れによっておうちの中が土砂だらけになっておりました。その台風被害を受けたおうちのそうじをさせていただきました。一歩おうちの足を踏み入れたとたん、「どうしたらエエんや」という大きな不安が襲いました。しかし、おうちのお母さんの「来てくれてありがとう。本当にありがとう。ありがとう。」と何度も何度も作業を始める前からの「ありがとう」の連発で私の不安は、なくなりました。「よっしゃ！絶対き

れいにします！」と何度もつぶやきながら作業をスタートさせていただきました。ずぶぬれになった畳、電子レンジ、冷蔵庫、テレビ、衣服、お仏壇、テーブル、食器、ありとあらゆるご家族の宝物が台風でずぶぬれになってしまっていました。一緒に参加していた大学生の野球部の学生さん、学ぶ会の皆様とひとつずつ丁寧に庭へ運びました。そして、約五時間ほどの作業で見違えるほどきれいになりました。おうちの方も喜んでくださり、ほんの少しでもお役に立てたことが本当に嬉しく思えました。この作業のとき、意識したことがありました。それは、「現地の方にありがとうと言いきっかけを作りたい」ということでした。行きのバスの中で、浅井先生から「現地の方は、ありがとうをたくさん口にされますが、ありがとうと言ってもらうことは少ないのではないか。」とおっしゃられていたのを聴き、大切なことに気がかせていただきました。だから、現地の方が、差し入れを出してくださったときには、心いっぱい「ありがとうございます！」と言わせてもらいました。その直後の「本当？わあ！嬉しい」というお母さんの笑顔が本当にステキでした。人として一番の喜びは、「人を喜ばせたとき」「人のお役に立てたとき」なのだと思われました。そのためには、現地の方のお心づかいに、遠慮するのはなく心いっぱい受け止めることが大切なので

はないかと思いました。

最後になりますが、前回の被災地に学ぶ会から大阪に帰ってきてから被災地で亡くなられた方の分まで一生懸命生きるという目的で三つの目標を立てました。

①すべてのクラス（19クラス約700名）で震災について語る

※九月二五日現在8クラス約320人で実施

②十月五日の文化祭で「被災地の方にエールを送ろう」というテーマで学年全員で合唱する。

※オワリはじまり（かりゆし58）と明日という日がという2曲を練習中

③自分自身が新しいことに挑戦する（ギター弾き語りへの挑戦）

という三つの目標です。

この三つの目標を達成できるように引き続きがんばります。特に、③の自分自身の新しい挑戦ですが、ギターの弾き語りということに挑戦しております。子どもたちにも、大人が一生懸命挑戦しながら生きる姿を見せたいという思いで短期間ではありますが、毎日練習して、第四回被災地に学ぶ会の出発の日に子どもたちの前でギター弾き語りを披露しました。全員ではありませんが、たくさんの方の拍手をもらいました。そして、バスの中でその様子を音声ですが、聞いてもらいました。すると、是非、被災地でも弾いてみないか？

というお声をかけていただきました。次に行かせていただくときには、東北の方たちに心こめて弾き語りをさせてもらいます。そのために、練習をやめません。いつも東北のみなさんの喜ぶ姿をイメージしながら練習します。本当に些細な挑戦ではありませんが、自分が自分らしく一生懸命生きることを忘れずに毎日を大切にします。このように、自分の生き方を見つめなおす貴重な機会を与えてくださる日本を美しくする会の鍵山相談役、大谷先生はじめ、作戦会議等してくださる方々へ感謝の気持ちを忘れずに毎日を大切に過ごします。ありがとうございます。

★大阪府60代 男性★

今回初めて被災地に学ぶ会に参加させていただき、先ず未曾有の大惨事に被災地へのバスを提供いただきました「日本を美しくする会」に又この会を大変お世話を下さいました大谷育弘先生をはじめスタッフの先生方に心から感謝申し上げます。有難うございます。そして私たちを受け入れて下さった被災地の皆様にもお礼を申し上げます。

地震津波が齎せた大災害に続いての今度の台風15号による暴風雨。あまりにも惨いこの現象に思わず天を恨みたくもなりました。出発の前に、

尋常ではない一種の覚悟で被災地に赴かねばならないと感じた。

避難所である鹿妻小にお邪魔し活動が始まった。当初一七〇〇名の被災者であふれたこの避難所も今は三十数名にまでになったとかがらんとした体育館に一種寂しさを感じた。

私たち掃除に学ぶ会メンバーは三人でトイレ掃除担当と決まった。トイレは想像より綺麗なトイレで各地の掃除に学ぶ会が来られ掃除されていること、又被災者が交代で綺麗にされていることが伺われた。そこで手を付けてられないところを中心に清掃をさせていただいた。一見美しいトイレも、なお手を加えることによって空気は一変した。現場に直に触れることの大切さを改めて学ばせて頂いた。

その後、全校生徒の八割が死亡または行方不明となった大川小学校に連れて行って頂きその惨状に思わず全員が無言での焼香となった。その惨事を想像するに、余りにも耐えがたい心情となり思わず心で般若心経を唱えていた。

あの美しいメロディで歌われた北上川が牙を剥いた「どうして」「何故」の思いが頭を巡る。黄昏迫る、まして立ち入り禁止である筈の、おそらくもう使われないであろう壊れた校舎の中を、一人の男性が無心で掃除をしておられる姿が目

どうした思いであろうか？

子供を亡くした父親だろうか？ それとも行方不明の子供の父親だろうか？

帰阪した今 あれは幻であったのだろうかときえも・・・

愛唱歌であった「北上夜曲」は悲しみの歌に変わってしまった。

夜、消灯時間が過ぎ避難所のリーダーを努めておられる浅野さんのお話を聞かせていただくこととなった。普通ならお願いすらできないことを快くお引き受けくださった背景には、今日までに大変な信頼関係を構築してこられた大谷先生のご努力があったことであろうことが窺い知れた。

お話の中で「被災者は地震を経験し一時的に人間が変わることもあるが、すぐにまた戻って地が出てしまう」との事を伺い。これは恐ろしいことだとわが身を振り返る。日々の研鑽で確固たる自己を築きあげねばならぬと心に誓った。

二日目 牡鹿半島のボランティアセンターに向かう。ボランティアには各地から大勢の人々が力になるべく来ておられる。中に山形掃除に学ぶ会の黒沼範子さまをはじめ約30名のお方がお越しになり 一緒に台風の山津波で床上浸水の被害にあわれたお宅の清掃を担当することとなった。

家に入りその有様に絶句する。床は泥だらけ。一

緒の班になった大阪産業大学野球部の学生さん 大阪教育大の学生さんたちと作業開始。若い人たちのパワーは凄く、頼もしい。手際よくなる確に行動。特に重いものなど積極的に運んでくださる。泥だらけの畳は非常に重い。

午前中に家は空き家状態、床板まで綺麗に水洗いし泥は無くなった。若い大勢の力は誠に見事で輝いている。特にスコップで泥をかこうとしたとき、「私がやります」と産大生。何回かそんなことがあり、私はスコップを触っただけとなった。年長者に気を配ってくださいる学生さん。そのような指導をなさった宮崎正史先生に敬服をいたします。

被災したその家の年老いたご婦人が、わたくし達に気を遣われ、おにぎりとか果物とか栄養ドリンクまで出してくださいました。被災され避難所に暮らしておられ、ご自分の事すら不自由であるにもかかわらず心遣いしてくださいることの温かさ。心に通い合う何かを感じた。

家には綺麗な仏壇がありそこまでは水没しなかったようだ。仏壇には本来あるべき仏像や位牌はなく、おそらく大切に避難所に持って行かれたのでは等と想像する。お話を聞けば地震の折は津波が寸前まで押し寄せてきたが、辛うじて助かった。だが今回の洪水は深夜でもあり、本当に恐ろしかったとか。胸に達する水位で、高いところに

避難するためロープを消防団に張ってもらい漸く助かったと話された。神仏のご加護であったのかも。

午後から細部の掃除を進める。トイレ、窓ふき、庭の泥かき、押し入れ、要、不要品の分別、ごみの分別等、一軒の家の丸洗い状態となり、すっかり綺麗になった。改めて人手のパワーを感じた。

夕方になり避難所に戻る。今まで敷き詰めてあった畳が、別の班の力ですっかり元の体育館となっていた。あるべき姿となっている。子供が嬉しそうにバスケットボールをしていた。感動さえ覚える。半年以上にわたっての避難所生活。精神的にも肉体的にも大変苦痛を強いられたであろう環境にも、もし自分なら耐えられたらどうか？このことを解決するには、平常時をいかに生きるか、積み重ねて行く事において克服できるのではないだろうかと考える。而今をどう生きるかが命題となる。

避難所の方々とのお別れが迫った。浅野リーダーは「有難う ありがとう アリガトウ」を目に涙を浮かべ仰って下さった。こちらこそ有難うで私たちを受け入れ宿まで提供してくださった。普通なら考えられぬことである。被災者の方々には本当に感謝の念でいっぱいである。涙の別れもすぎ、バスの車中の人となる。一人一人の体験発表が始まる。みんな深い思いを語られる。それだけ

被災地で学べたことが沢山あって、その時間は四時間半を過ぎた。しかしそれはあつという間の時間であった。各自、熱い心と感謝を話された。特に先生方がこの体験を教育に取り入れ、心の授業をなさろうとされていることが大変ありがたく思った。ついつい学業成績のみに偏重しがちな現在、心の教育ほど大切なものはなく、この熱き先生方の目指されているところを知り、日本の未来の明るさを肌身で感じさせていただく四日間となった。本当に有難うございました。こうした先生方を少しでも応援できるよう微力を尽くしたいと思う。

終わりに、ご一緒させて頂きました皆様方に感謝を申し上げます。有難うございました。合掌

★★兵庫県20代 男性★★

私は今回被災地を初めて訪れました。石巻に向かうバスの中でDVDを見せていただいたのですが、悲痛な想いにはなりませんが、実感があまり湧いて来ないと言いますか、震災後にテレビの前で涙したのと大きくは変わらないように感じています。しかし、実際に訪れて自分の目を見た姿は全然違いました。記録された映像と同様の光景が広がっていたことに、「あの出来事は本当だったんだ」という言葉がまず心に浮かびました。

あれが幻の出来事であったならばどんなにいいかという願いがあったのかも知れません。とてもショックでした。

私のそういった認識は本当に切実さを持って考えられていなかった証拠であると感じられました。ところが、その切実さを持つために思っただけで現地に訪れてみても、被災された方のお話をお聞きしても、心が張り裂けそうになったとしても、決して「自分のことのように」などは考えられないということに気が付きました。それは私の想像力や共感する気持ちの不足かも知れません。あるいはただの一度訪れただけで寄り添える気持ちではないのかも知れません。更に言えば、「自分のことのように」考えられるようになりたいという思いは、苦しみを分かち合った気になりたいという思いだったのかも知れません。切実さを持つて感じ取るというのは、そんな軽々しいことではなかったのです。現時点の私にできることは、この地に足を運ばせた、「自分に関係のないことであるとは思わないこと」という気持ちを、更に深めて行くことしかないと思えました。そんな気持ちは、初歩中の初歩の気持ちであると思えます。ですから、私は今回でやっと、本当に初めて被災地の方へきちんと心と体を向け始めたと言えるのだと思います。

とは言え、本当に大切なことはそれをどんな行

動に移すかということです。こうして訪れるまでもそうでしたが、訪れてからも、「どうすればいいか分からない」という状態は続きました。そんな時、同じボランティアの方の姿に、本当に感動しました。ひとはこんなにもひとを想えるのだということ、それぞれの方のお人柄、持つておられる考え、信念、深い愛情に、涙が出そうになりました。もっと重要な事実が、それらを引き出しているのが、被災地の方であるということです。ボランティアの皆さんは、口を揃えて「被災地の方にこちらが元気をもらっている」というようにおっしゃいます。そのようなエネルギーと愛情の受け渡し合いが行われている場所に一緒に居る事ができて本当に心が温かくなりました。そして、この体験記がまだまだどなたかの背中を見つめているような立ち位置からの視点で書かれていることを改めて自覚するとともに、またその場所に訪れて、今度は自分の誠もそこに差し出せるようにしたいと強く思いました。

「またその場所に訪れて」と申し上げましたが、今回訪れることができたのも、企画をされた皆様の存在、先の会で現地の方との関係を築かれてきた歴代のボランティアの皆様、過酷な条件のもと私達を運んで下さった運転手の皆様と、様々な人の力のお陰である事を忘れず、次回に参加したいということも当たり前のように発言しないよう

に気をつけたいと思います。たくさんの方の希望者の方がおられる中で、今回は本当に「行かせていただいた」のだということをお忘れず、心から感謝し、まずは今回の体験をしっかりと反芻したいと思います。

最後に、自分にとってのことばかりを述べてきましたが、大切なことは現地の方の暮らしが一日でも早く取り戻されることです。現地では復興が思うように進まない状況の中、台風による新たな被害も生まれているような状況であり、無力感を感じてしまうばかりですが、全国から多くのボランティアの方が来られていますので、本当に皆で支えることによって、少しでも早く被災地の方が安心して暮らしを送る事ができるよう心からのお祈りして、私の体験記とさせていただきますと思います。ありがとうございます。

★★滋賀県30代 男性★★

私にとって、今回で四度目の石巻でした。鹿妻小学校に泊まるのは、今回がはじめてで、浅野さんにお会いするのも、はじめてでした。浅野さんが、夜に、お話をしてくださいました。必要なものひとつとして、「行政のセンス」とおっしゃっていたことに共感をしました。というのは、九月の初旬に、石巻のある方にお手紙を

いただき、その中で、「お弁当を配るのに、石巻市内だけで、一日1000万円の経費がかかっていたこともある」と書かれていたことを思い出したからです。そのほか、いろいろなお話をお聞きして、「自立」がひとつのキーワードだと感じました。

さて、私は、今回初日には、石巻工業高校の野球部の練習会（大阪産業大学の学生の野球教室）に帯同させていただきました。石巻市内の硬式野球部員で、津波でやられた高校生はいなかったのですが、やはり、その親族関係となると、数え切れないくらいなのだそうなんです。いろいろな想いを秘めながら、毎日の練習や学校生活を過ごしているのだらうと思えました。また、野球という目の前に一所懸命に取り組むものがあることで、精神的にも落ち着くことができているのではないかと思います。と同時に、逆に、部活など一所懸命に取り組むものがない生徒や、進学など進路に関して何かあきらめざるを得なかった生徒の精神状態を考えると、いてもたってもいられない気持ちになりました。監督さんとお話をしていると、「小さなこころの荒みが、ちらほら見えてきている」ということでした。今後支援の形が変わっていくことは間違いないことですが、「教育」の二文字は、大きなテーマになってくるように感じました。

二日目は牡鹿半島での、瓦礫撤去作業となりま
した。ボランティアセンターにて指示を受けた民
家のお掃除をさせていただきました。その民家は
大変な状況で、畳はびしょびしょに濡れて使えな
い状態。お風呂場や、廊下などは、歩くと長靴の
裏に泥がべっとり付くような状況でした。

そのお家の方からお聞きしたのですが、今回の台
風で、津波以上の浸水だったようです。津波は床
下の40cmほどの水位だったようですが、今回台
風のために、山から流れてきた水で130cmの高
さまでに水位があがったそうです。そのような、
状況でしたが、我々は、こつこつと掃除をすすめ
ていきました。そのお家の方が、

「年だから動けなくてごめんね」

「ありがとうございます」

「お水をしっかり飲んで、水分補給してね」
と、常にお声かけをしてくださりました。また、
このボランティアではじめて声をかける班のメ
ンバー同士でも、一緒に協力して掃除をすすめ
ていくうちに、自然と「○○してくれない？」「あ
りがとう！」といった会話が多くなり、いいチー
ムになっていきました。以前、鍵山先生が「掃除
をするとチームワークがよくなるんです」と、お
っしゃっていたことがよく実感できました。

今回は四回目でしたが、東北ボランティアでは、
回数は関係なく、毎回違った学びをさせていただ

けます。その中で思うことは、無理をしてはいけ
ませんが、やはり、できる限り多くの方に、直に
この状況を見てほしい、現地の方のたつたお一人
でいいからお友達になってほしい、ということ
です。そういった意味において、東北へのボランテ
ィアに、これほど参加しやすいツアーはありません。
大阪便教会主催のボランティアバスに一人
も多くの方が申し込まれることを願ってやみま
せん。ありがとうございます。

★★大阪府20代 女性★★

一日目は、鹿妻小学校の中庭にある土管の山の
草抜きをしました。向かっていると、シーソーの
ところに男の子が一人座っていました。あとから、
お姉ちゃんも来たのですが、金先生に会いに来て、
プレゼントを渡そうと思っていたのです。プレゼ
ントは、男の子は画用紙に絵を描いて、お姉ちゃ
んはプーさんのマスコットにメッセージを書い
たものです。男の子は避難所の子ではないですが、
来ることを知り、プレゼントを準備してまでして
来たと思うと、ここまで想ってくれているという
ことにとても嬉しく思いました。

草抜きをしていると、四人の女の子が、「手
伝っていいですか」と言って、手伝ってくれた。
四人は、夏祭りにも来ていた、小学四年生だ。と

でもよくしゃべり、笑っていた。
しかし時には、

「この山は、いつ崩れるかわからないから上った
らだめだと言われている」

「このヒビは地震でできた」

「松林の近くに住んでいたけど、津波で家が流さ
れて、学校の近くに引っ越した」など、話してい
た。

たくさん話してたくさんしゃべってたくさん笑
って、「たくさん笑って楽しい」と、言っていた。

一日目は、牡鹿半島で作業をした。私は、小
学校の教師で、出発する日に、子ども達に被災地
に行くことを伝えた。そのときに、

「みんなニュース見た？台風15号で東北はま
た大変なことになってるらしい。一度避難所を出
た人も、また避難所に行ってるみたいやで。今回
行って、どんな作業をするかわからへんけど、が
んばってくるわ。」といった。

台風の影響で町は冠水し、泥だらけになってい
た。私は一軒の家のお手伝いをした。家の横の水
路は土石流で1メートルくらい石や岩が積もっ
ていた。自然の力はすごい。人間が何人も力を合
わせがんばっても及ばない。石や砂利を土のう袋
につめ、大きな石はそのまま一輪車に乗せて運
んでいく。大きなスコップで力いっぱいすくおう
としても、大きな石につつかえてなかなかすくえ

ない。石や砂利をつめた土のう袋はとてつもなく重い。運ぶときに抱えるので、全身泥と水で汚れていた。この家には津波での被害がないように思えたが、もともとないとこに段差ができていて、家も少し傾いていることを教えてもらった。また、休憩時間にお茶やアイス、お昼にはおにぎりを出してくださった。たくさんのお心遣いをいただいた。終わったときは、「ありがとうございます。」と言っていただいた。やりきったという達成感があるほど作業が大変で進まず悔しい。でもこの家の方に、良かったと思っただけなら、嬉しい。

避難所に帰ったら、驚きの光景。体育館の中があの暖かな雰囲気。避難所から一変、小学校の体育館に変貌していた。たみはなくなり、子ども達は、バスケットをしていた。本来あるべきすがたに戻ったとともに、この避難所とお別れになる、そして、この避難所の方々とお別れになると思うと、とてもさみしかった。

この避難所の本部長である浅野さんのお話を聞き、涙を浮かべた様子は、今までの長かった日々を感じた。

「一歩前進ではなく、百歩前進です。」
この日を迎えられたことがとても良かった。ここに来て、たくさんのことを学ばせていただいた。また、被災地の方の力になれるよう、続けていきたい。そして、学校に行つて、職員や子ども達に

このボランティアでの経験をお話したい。

★大阪府60代 女性★

日本を美しくする会の御支援の賜物のバス仕立て、大谷育弘先生を中心にお世話下さった先生方のお蔭で被災地石巻へ再度参加させて頂きました。

JR尼崎駅で集合乗車、先生及び先生をめぐす学生が大半の中一般人参加です。少し平均年齢を上げる効果？若さあふれる車内、自己紹介と参加動機、熱い想いに心うたれる思いで拝聴しました。

石巻市立鹿妻小学校へは第二回 約一・五ヶ月前の再来ですが、付近も少しずつ前進している様子が見てとれました。被災所では前回御会いした方々と「こんにちは、お元気ですか」と笑顔で御挨拶させて頂きました。笑顔が返ってきました。

一日目は墨武司さん、平井久造さんと私のトイレ掃除の大先輩と御一緒にトイレ掃除を拝命、午前中は男子便所最初は普段通りの手順でしたが窓の小さな汚れも気になられて様で、窓枠から窓をはずしいつもの時間制限の中と違い今日は心行くまで徹底的にピカピカにしよう。三人の息もピッタリでした。微粒な砂も残さないと思いを込めての作業、午後は最初から窓をはずし、大きな

時間短縮でした。終わった後は何とトイレのさわやかな風を感じ、ただ建物外部に新たに設置された最新の水を使用しないトイレ、初めて見るタイプで水で洗う事が出来ず拭くのみでしたがすっきりいたしました。

大川小学校へ出かけますとの声でバスに乗車、野球チームも一緒に、道中先日の台風によりトンネル、道路も通行不能の所もあり、せつかく刈り取るばかりになっていた稲穂も家もあちらこちらで冠水、自然の猛威 なすすべの無い状況むごいと思えました。

大川小学校周辺も少し様変わり浸水、ガレキ山の変化亡くなられた方々の霊前に用意して下さったお線香をたむけ御冥福をお祈り、使用不能な校舎を掃除されている方があり深く大きな悲しみが増され伝わりました。

道の駅での食事入浴等心配りに感謝。就寝前に浅野仁美様のお話をお聞き出来、当初1700人位から今月中に0人に天の声に耳を傾けられ行動せざるを得なかったにしろ、被災者にとつて素晴らしいリーダーのもと何人かの方は、変な言い方ですが良かったです。リハビリになりました。と明るい声と顔。そこに至るまでの御苦労浅野様の双肩にかかっていたことをより一層偲ばれました。女性として人として脱帽、お教え学ぶことばかりです。

五時前までぐっすり、光と朝の冷気に包まれていました。東京からのバス到着寅さんの登場。近くの方にお声掛け今後の生活等お話を伺っている内あわただしく出発、今日は牡鹿半島へ、何をさせていただけるのか楽しみ。道中台風による道路等崩壊がいたるところあり、大地震、津波そして台風 手つかずの所多く言葉が無くなりました。

牡鹿ボランティアセンター到着、指示待ちの間、山形からのバスもしかしたらと思っていた黒沼範子様とお出逢い。熱いハグ、便教会総会でそしてこの震災でいろいろお世話になりました。多くの言葉は不要です。ちなみに黒沼範子様は認定NPO法人日本を美しくする会の監事をして下さっています。あいにく行動は別々でした。

津波被害は無かった民宿の台風による土砂の撤去作業。11人中庭と物置の清掃と建物裏、横の幅1.5m高さ1m位の側溝の土砂取り除き作業、一軒下迄は重機が入ったのですが傾斜のため重機が入らないので要請。側溝は墨さんと私、百香さんチーム。墨さんは元大工さんとかスコップの使い方も無駄が無く美しい。私は土嚢袋の口をあけ大きな石を別にしながら持てる位に調整の補助作業、何と言っても全部埋まりその上を水が流れての災害いかに今後家に水が入らないように願いを込めて。墨さんは御両親のふるさとで

同じように道路が高くなった水害を経験され余計に思いが深く行動に反映されていました。あまり無理せずに腰大丈夫と懸念していました。出来あがった土嚢袋大小の石、土嚢袋は水を含み隣家との塀は、傾き通路は水で流されがらんだ大木先生他学生さん等前をびしゃびしゃになりながら黙々と一輪車あるいは抱きかかえて捨て場にて整理して下さいました。

午後は百香さんチームは泥をかぶった畳清掃に役割変更。五分休憩です、そして残り三分の声がかかるが墨さんの時間があったいなに感動勿論異論なし、出来あがった土嚢袋及び石はどれ位。墨さんの予測とガンバリでスーと一ヶ所水が抜ける所ができ、上部から水の流れ道を深くされてため当分は直接家の中に水が入らない状況となりました。「よかった」御苦労さまでした。

腰大丈夫でしたか？若い学生の方のも両手に土嚢、一つにしないと腰が悪くなるよ、後で困ると声掛けしながらでも先生方学生さんの若いパワーを見せつけられました。おかげさん納屋のコンクリートの上でもタオルを滑らせる方法威力がありました。再集合ボランティア前で写真撮影を、山形のバス全員揃いながらも待っていて下さいました。お別れの握手気づきが遅くごめんなさい。また車中で山形からの差し入れブドウおいしく

いただきました。民宿の方も休憩時、食事時のお接待喜びが伝わってまいりました。個人の力ではいかんとも出来ないことを、日本を美しくする会ですと伝えると「ああ」と喜びの声ができました。皆さまお疲れさまでした。

鹿妻小学校に到着、見事に空気の澄んだ美しい被難所から体育館に変身した場を拝見。浅野様の念願、当初より美しくして学校に返したいとの願いが最後に確認拝見でき大感動でした。浅野様とも熱いハグお疲れ様、お幸せにと思いをこめて、大谷先生のお蔭、願いは叶うのですね、それにして日本を美しくする会のお力が感動感動 学びそして人の温かさがいっぱい、いっぱい味わわせていただいた四日間でした。今後も素晴らしい方々のご縁が続きますように願いを込めお別れました。

上品の湯では千種様にお声がけいただきいつもお世話になるばかりですのに。ご縁のあったすべての素晴らしい方々のお教えずびに感謝申し上げます。鍵山先生の「人が人であるかぎり人はみな美しい」しあわせです。身体も大きな感動のお蔭でエネルギーが回復し少しの心地良い疲労感「ありがとうございました。おかげさま」

★★大阪府30代 男性★★

このたびは貴重な学びをさせていただきありがとうございます。大谷先生始め、避難所リーダーの浅野様、バスの運転手の方々、そして、今回出会った全ての皆様のご縁をありがたく思います。

多くの学びの中から、特に感動したのは、一日目の牡鹿ボランティアセンターでの活動です。私の担当は、台風15号の影響で土砂まみれになったガソリンスタンドの復旧でした。道路はブロックが外れ、穴が開いている状態。地面に散乱した土砂をその穴に埋める作業をくり返し行いました。そんな時に、このスタンドの岡田様が今日に至るまでのお話をしてくださいました。

「震災直後、このスタンドを役所の上から見ていたが、海水がスタンドの屋根の上まで来ていた。水が引いた後は瓦礫だけが残り、まわりの建物も多くがなくなっていました。やっとの思いで片付け、この連休明けには営業を再開するつもりだった。この辺の方々にとってガソリンはライフラインに匹敵するほど重要なもの。それだけに街のみなさんの期待も大きいのに。だからこそ、この台風の影響がショックで。」

体が、心の底から熱くなりました。ここまでの被害を耐え、一生懸命生きている方が、まわりのみなさんのことを考えてつらい思いを

している。なんとしても復旧させたい、そんな思いがこみ上げてきました。

午後からは応援も駆けつけ、作業がはかどりました。掃除だけでなく、営業ができるようにと、側溝の掃除や床磨きまで徹底しました。作業が終わり、「これでまた営業できる」とおっしゃっていられた岡田様の笑顔が忘れられません。人のために生きることがエネルギーになることを改めて学ばせていただきました。

今回来させていただき、長く支援を続けていくことの大切さを改めて感じました。特に浅野様のお話は、まさに「現場の生の声」であると感じました。これらは、報道や人づての話の聞くだけでは分からない。そして、自分も分かったような気になつてはいけません。そんなことを実感しました。今後実際に足を運び、真摯に学ばせていただく姿勢が続けて取り組むようにしていきます。どうもありがとうございました。

★★大阪府40代 男性★★

「感謝の心」

まず、鎌山先生はじめ日本を美しくする会のお陰によりまして、被災地に学ぶ会に参加させていただくことができました。大変ありがとうございました。お世話をいただきました、大谷先生、宮

崎先生など中心となりご準備くださいました先生方にも心から感謝申し上げます。ありがとうございました。また、往復安全運転にて私たちを連れて行ってくださいました運転を担当された井上さん、安井さんにも心から感謝したいと思います。いつも皆さんも言われることですが、すべて整えていただけて私たちは行くだけという、本当に学ばせていただいている身分に感謝したいと思います。ありがとうございます。

今回印象に残った事 「リーダー浅野さん」今回は野球担当だったので、牡鹿には行っていません。ある意味ひたすら汗をかくという貢献はしていません。野球担当とはいえ、直接野球をご指導いただいたり、交流をしていただいたのは大阪産業大学野球部の部員の皆さんです。いろいろの貢献の仕方があるのでなんとも言いがたいところではありますが、今回の学ぶ会で特に印象に残った事は、避難所のリーダー浅野さんのお話や僕の友人からのお話です。（友人からはなしは後述）

多くのお話を直接伺うことができたことが、今回特に印象に残った事です。

僕の友人は鹿妻南四丁目でした。避難所のリーダー浅野さんは二丁目だったそうです。今回直接その頃のお話を聞き、胸が締め付けられる思いでした。浅野さんは娘さんと非難しようとするその

時に津波に合わせ、雪の降る中、屋根の上、二階で一晩過ごされたこと、ご近所にお声を掛けた年配の方々はそのまま亡くなられたこと、当日のことは自分の想像とは大きく離れすぎ、イメージすることすら難しいです。

避難所での生活では、1700名もの方々が避難されていた事、略奪ではないにしろ、物を取る事人もいたこと、避難所においても物がなくなつたこと、石巻市が避難所の食費としてかかった費用、最大事で一日1千万円ということ、多くのことを僕は知りませんでした。

半年を体育館で過ごし、結局は被災していろいろがいまいが人は変わらないという言葉でした。やる人はやるし、やらない人はやらない。学びでした。

「鹿妻小学校体育館」のこと

第二日目、鹿妻小学校は月末の明け渡しを前に大掃除をされました。日本を美しくする会東京本部の方々の共同活動、國方警部の寅さんにはじまり、美しくする会の方々の掃除力の凄さを、身をもって感じました。今後自分自身も積極的に参加し、学ばなければならぬと強く感じました。今回いよいよ避難所の体育館を学校・子どもたちに返し、仮設住宅に移りそれぞれが自立して生活してクタイミングにお伺いすることができ、わずかではありますがお手伝いが出来たこと、その

すべてが貴重な学びとなりました。

体育館に泊めていただきました。もちろん寝ました。しかし、これが数ヶ月、毎日と考えた時、やはり想像することができませんでした。支援物資の管理、戸締りなどなど責任者の浅野さんの責任の強さ、ものすごく学びでした。果たして自分だったならば、責任感を持ち避難所で生活できただろうか……答えは出ませんでした。

「野球交流」のこと

今回、野球の交流担当をさせていただきました。宮崎先生のご指導のもと、大阪産業大学の部員の皆さんに第一日目は石巻工業高校において、石巻工業高校と県北にあります古川高校の二チームと交流していただきました。

石巻工業高校は秋季大会中で準々決勝戦数日前でした。

宮崎先生はじめ産業大学の学生さんとの交流が非常にいい刺激となったそうで、その後の試合において力を発揮され、初の決勝戦進出、結果準優勝、東北大会出場を決めました。結果的に素晴らしい交流会になりました。お昼ごはんには保護者の方々にカレーをご馳走になり本当にありがたい歓待を受けました。今は東北大会でも活躍をしていただき、春の選抜大会に選出される事を願うばかりです。そうだったならば、本当にミラクルですが、かなり運を引き寄せている気がしますので、大いに期待を押ししています。

第二日目は鹿妻小学校の野球チーム、小鹿クラブでした。子どもたちは心からの笑顔で大学生の皆さんとの交流を楽しんでくださいました。保護者の方々から見てもはじけるような笑顔だったようです。中には自宅が流され、仮設住宅で暮らしている子どもさんもいらつしやるとの事で、転校したりと、野球の時だけが今までの友達と過ごす時間ということでした。野球も大事なある意味癒しの交流の場になっているようでした。

両日ともに、大阪産業大学野球部員の皆さんのコミュニケーション力の高さがものすごく素晴らしいと感じました。両日メンバーは違えども高校生にしろ、小学生にしろ、瞬時に打ち解けて交流してくださっていました。本当に素晴らしかったです。これは宮崎先生が日々学生に対してのご指導とチームの雰囲気、チームの文化なのだろうと感じました。大感謝です。

「個人的な想い」

石巻は個人的に所縁のある地でした。親友、友人、知人など多くの方々が住まわれています。石巻のみならず、特に宮城県内、気仙沼、仙台、名取、岩手陸前高田、幸いにも直接亡くなるなどはありませんでしたが、被災はされました。一番大きな被災を受けたのが、石巻の親友でした。その親友の住まいの校区、震災当時の避難先が奇しくも今回お世話になった鹿妻小学校でした。本当に

偶然ですが、第一回目の雄勝町に参加させていた
だいた時に第二回目以降の活動拠点として調整
されたのが鹿妻小学校でした。縁を感じます。

親友の家族は、自宅にご両親、次男、長男は高
校のグラウンドで野球の練習中、奥様は職場、本人
も内陸の職場、長女は友達と遊んでいてと、家族
バラバラな状態だったそうです。本人は職場のテ
レビでヘリからの名取市近辺・仙台空港あたりの
津波の映像を見て、あわてて自宅に戻ろうとした
そうでした。というのは、名取市あたりよりも石
巻の方が先に津波が来る事を知っているからで
した。自宅に戻ろうにも通信手段も断絶、石巻近
くで車は水没、車を乗り捨て、胸まで水につかり
ながら、その日は自分ひとりが校区とは別の中学
校で一晩を過ごしたそうです。もちろん家族の安
否はわからない状態です。次の日、早朝から自宅
に歩いて向かい、トンネルを出た瞬間の光景に絶
句したとことでした。“なんだ、これは！”車
はひっくり返り、いたるところに遺体があると、
どうなってしまうんだ、と感じたそうです。
避難所の鹿妻小学校でご両親と次男と再会をし
ますが、ご両親と次男は玄関を出た瞬間に津波に
流されたそうです。父親は木に掴まり数時間浮い
ていて助かり、母親と次男は津波に流されながら
ちようど人のいる方向に流され、運良く引つ張り
あげてもらい、一晩ペランダで過ごしたそうです。

ずぶ濡れで、雪の降る中、そして真っ暗な中、し
かし、市の中心沿岸部、門脇、日和山辺りは大き
な火災となり、空は赤く、サイレンだけが鳴って
いるという、恐ろしい状況だったそうです。今の
私には想像することが出来ません。

結局家族全員が再会できたのは三日後だったそ
うです。鹿妻小学校で家族全員が再会できた時の
喜びは言葉には出来ないほどの喜びだったそう
ですが、その場では喜ぶに喜ぶ事が出来なかつた
そうです。すぐ近くに誰がいない、彼がいない、
と家族の安否がわからない人ばかりだったから
だそうです。

津波に流された中学二年生（当時一年生）の次男
は、しばらくは夜中にうなされたり、暴れたりす
る事がたびたびあったとの事でした。心に傷を負
っているんだなあと感じました。

石巻工業高校野球部の監督さんからも多くの
お話を伺いました。その中で衝撃的だったのが、
気仙沼光洋高校のお話でした。地震の時、野球
部員はグラウンドで練習中、生徒も先生方に多くい
らっしゃったそうです。上の階へ上の階へ逃げ、
最後は屋上に逃げられたそうです。津波の第一波、
第二波、第三波推移がどんどん上がり、次の波が
着たら屋上の自分たちもさらわれると感じ、覚悟
をして生徒たちはみんな手で手を繋いで祈ったそ
うです。先生方は最後の制服を、今までタバコを

吸ったことのない先生までが吸われたそうです。
本当に追い込まれた極限の状態だったことがわ
かりました。その後津波で屋上がさらわれること
はなかったそうですが、もちろん一晩、救助が来
るまで屋上で過ごしたそうです。その間に多くの
流されているものを見ていることはいうまでも
ないのですが、現地で何うお話は、本当に衝撃的
なことばかりでした。

「最後に」

今回の学ぶ会において、鹿妻小学校を訪ねるこ
とができ、そして、個人的な友人たちに会うこと
もでき、本当に一人別な幸せをいただきました。
本当に感謝しかありません。

大川小学校に参ったことはもちろん胸の痛む
ことでした。修養団の方々、山崎さんにお会いし
たことも導かれていると感じました。大川小学校
のみならず、本当に広範囲において命が失われた
こと肝に銘じた今回の学ぶ会でした。

震災から半年が過ぎ、街中や生活は戻りつつあ
るでしょうが、復興にはまだまだ細く長い支援が
必要であることを忘れずに、大阪の地で日々生活
していききたいと思えます。ありがとうございます。

★★大阪府50代 女性★★

今回は、一日目はボランティアセンターのすぐ近くのガソリンスタンドであった。スタンドの前の歩道が先日の台風でえぐられて30cmぐらいの穴があいている状態だった。そしてそのまま土砂がスタンドの3分の1以上コンクリートの上に土砂が乗り上げていた。

持ち主の岡田さんは夜、車や、人が誤ってここに落ちたら大変なことになる・・・という思いで一生懸命泥を運んでおられた。お話をうかがうと津波で天井まで瓦礫があり、どうしようも無いものだけ重機で取ってもらい、後はこつこつ一人で片付けたい。そして半年、この連休明け9月26日から営業を再開しようとしていた矢先にこの台風。途方にくれていたようだ。

私たちの班は、大学生三人と教員二人だったが、みんなで力を合わせて午前中かなり泥を取り除き、穴も平面になった。午後から二つの班が手伝いに来て下さり、泥もすべてスコップで取り除き、しかもスタンドもデッキブラシできれいに磨いてくださった。岡田さんは大変喜ばれた。「来週の水曜日、遅くとも木曜日には再開できそうです。」と力強く言われた。

昼休み、近くの団地に行くと、部屋の中はメチャメチャで時計は2時50分で止まっていた。大學生はさすがすぎる・・・といって帰ってきた。当

時の津波のままの光景が残っていた。

二日目は鹿妻小学校避難所のたたみを取ってたたいて乾かして希望者に渡すという作業。午後からは体育館の中の荷物の移動と窓のさんを拭く作業。15時頃「おなかすいた——」というところ23歳の大学生浅井さんが「夕飯をおいしくいただけたいですね」と。東京の皆さんと協力し、一気に体育館が本来の体育館の姿に変っていき、バスケットができるようになった。

東京のバスのメンバーに中で佐賀県から来た高校生、木曜日の夜行バスで東京に、金曜日の夜行バスで石巻に、日曜日のお昼まで作業をして東京に、夜行で佐賀に帰ると聞いてびっくりしてしまった。

今回は大阪教育大学の皆様、大阪産業大学の野球部の皆様のヤングパワーのおかげで本当に作業が進んだと思う。お天気に恵まれた二日間であった。8月に行かせていただいたときの中学生や小学生に会えたことも嬉しかった。

家に帰ってから、即トイレ掃除、窓拭き、特に窓のさん、洗濯、コンロの掃除と一気にやった。日本を美しくする会の方と三日間過ごさせていただけだったのでオーラが移ったのか、勝手にやりたくなった。不思議だった。今回も本当にありがとうございました。

★★大阪府60代 男性★★

被災地に行くのは三回目ですが、「被災地に学ぶ会」からの参加は初めてでした。そして、今回大きく二つの学ぶ機会を与えられたように思います。

一つは、もちろん「被災地」を通して感じたり気づいたり学んだことです。一日目の個人のお宅（山口喜美雄さん）での流された土砂を復旧させる作業は、瓦礫撤去作業とは違って、それほど大変なものではなく、我々のグループ10人の若い学生たちからは軽いお手伝いのようなものでした。しかし、腰を痛めている63歳の山口さんと奥さんの二人では、一日かけて出来るだろうかと思える作業でした。昼に「家に入って休憩しろっちゃ！」という山口さんに断って外で休憩する我々に、飲み物やバナナを・・・そして、自前の漬け物まで出して下さった。山口さんに作業を始める前に会った時は眉間にしわを寄せたやや不満そうな顔つきでしたが、全作業を終えて、何度も我々に宮城弁？の早口でお礼を言ってくれる浅黒いうっすら汗をかいた山口さんの表情が、秋の陽差しの中で幾分和らぎ笑顔がこぼれたように見えました。お役に立ち感謝されることは我々にとっても喜びであり力にもなると言うことをあらためて実感した機会でした。

その夜、鹿妻小学校の広い体育館の「避難所」

での一泊。避難当初1700人の方がおられた
そうで、どれほど大変な惨状だったろうと想像す
るだけで息苦しく感じた。今は、30数人の方が
ダンボールの板で仕切られたスペースそれぞれ
が自分の生活場。始めて見る光景に戸惑いなか
か寝付けないながら寝袋に入って時間が過ぎ朝
6時ごろ、一人の老女に「寒くなかったですか？」
と細い優しい声で呼びかけられました。私は「ハ
ッ」しました。こちらが気遣う立場でここに来て
いるのに、逆に声をかけられたことに感動しまし
た。そして、しばらくお話を聞かして頂く機会を
得ました。73歳。娘さんも息子さんもおられる
が、一緒に住まず一人仮設住宅に入るといふ。話
していて、老女の穏やかな口調の中に、軽い認知
症の陰を感じました。寂しさからかいつまでも私
のその場を離れようとしませんでした。それを疎
ましく思う自分を感じつつ、88歳と92歳で亡
くなった私の両親の晩年の有り様を思い出し「自
分もいつか」と、その老女がいとおしく感じまし
た。その後、三人で暮らすという男性（59歳）
とも話をする機会を得ました。家も職も失ったが
この男性には「家族」がいました。ぎりぎりのと
ころでの家族との絆が残されていました。

そして、その避難所で自らが避難者でありなが
ら、震災後の避難者と避難所の一切（物資の仕分
け分配、施設の管理、避難者の食事等）を切り盛

りしてきた代表の浅野さんのお話は圧巻でした。
一時間半の話の中身は、ここで小6の娘さんと半
年避難者と寄り添って暮らしてきた人でしか感
じ気づくことができない内容でした。津波の惨状
や避難所生活の様子を直接聞かせて頂いたこと
は、大きな収穫だったと思っています。津波の恐
怖、失ったものへの落胆失望、死への覚悟、今後
への不安などを抱えて避難してきた人たちの集
まった避難所。そこでの、人間の強さと弱さ、見
せかけの表と本心としての裏、すばらしい感動的
な一面とやまねめ殺気だった一面や醜さなどの
人間模様を感じ取れる内容で考えさせられた時
間でした。中でも、避難者の生活ぶりを見ていて
「人間の根本は急には変わらない・・・」という
話が説得力を持っていました。避難者の中には、
「初めは行儀が良くても・・・地が出てくる。家
庭の色が出てくる」と。弱い子は弱い。（我慢で
きる子は我慢する）今まで学校へ遅刻していた生
徒は、ここでも寝坊する、遅刻すると。その自ら
が避難者でありまた避難者を半年間日々お世話
している浅野さんの表情が、実にさわやかで、生
き生きとしていて、笑顔であったのが印象的で
した。真の強さを持った方を見た思いがしました。
まさに「辛苦に耐えてきた人の味」のようでした。
被災地のことで最も強烈な印象を受けたのは、
大川小学校での慰霊の時でした。津波に襲われた

無惨な校舎と玄関の柱が水につかたままの状
態が無言の恐怖を示していました。夕暮れのひん
やりした空気の中で、線香を供え手を合わせるこ
こみ上げるモノがあり、脳裏に刻む思いで何度も
校舎の方をふりかえってみました。

もう一つの学びは、参加された方々の姿勢でし
た。再開店を目の前にした鮎川のガソリンスタン
ドが、先日の台風の影響で泥をかぶった後を、参
加者全員で見事に元の姿に掃除したこと。そして、
何と言っても、出色だったのは、避難所として使
っていた広い体育館を元の体育館に再生したこ
と。浅野さんの「前よりもきれいにしてお返しし
たい」との思いに込めるように参加者80人ほど
が、大谷先生のめざす「ここを一つに」して、
徹底的に「そこまでやるか」の姿勢で掃除が出来
たこと。東京からの「日本を美しくする会」の方々
と一緒に掃除に学んでいる者同志が一つになっ
て作業している光景も圧巻でした。

また、今回大阪産業大学野球部の学生さんが4
0名参加されたこと。これは、監督でおられる宮
崎正史先生が、「被災地で何かを感じさせたい」
との思いで実現したことのように、学生さんにと
ってはとても貴重な体験をされたのではないかと
感じました。宮崎先生の教育姿勢に学ばせて頂
きました。

そのほか、参加された方の中にも松原周平先生

をはじめ多くの個性的な先生、教育大のみなさん、掃除の会の方など、四日間を「被災地に学ぶ」をテーマにご一緒させて頂いたことに心より感謝申し上げます。

最後に、このような「出会い」と「学び」の機会を企画、準備されいつも先を見据えて我々に

「生きていることの意味」を提示されている大谷先生には敬服し、また細やかな心遣いをして下さる姿にただ感謝です。ありがとうございました。

★★大阪府20代 男性★★

今回が二回目の参加になりました。この度は、日本を美しくする会、バスの運転手さん、共に学ぶ会に集われた皆様、そして大谷先生に大変お世話になり、またそれに気づかせていただくことができた回になりました。

二回目の鹿妻小学校は以前と変わらぬ穏やかな姿でした。ただ変わっていたのは、体育館の中でした。人は減り、少し寂しさがありました。そこでまず一日目の活動が始まりました。

私たちは月末に体育館を明け渡すための大掃除を手伝わせていただきました。まず、倉庫の片づけ。たくさんの使えなくなった物が出てきます。しかしこの倉庫、避難所の倉庫としてではないので、「体育館を前よりも美しく返す」のにぴった

りの仕事をさせていただけました。五人で一か所につき一時間半、一度からにした後雑巾がけをして使えるものを戻す作業。それを二か所しました。最初の状態を撮った写真と比較して美しくなつた倉庫を見て、気持ちがウキウキしっぱなしでした。

その後は体育館の窓を拭きました。かなりのハエの数におびえていましたが、そこにはそれをものともせず、真剣丁寧にピカピカに拭いておられる先生方のお姿がありました。そのかっこいい姿を見習い、一生懸命石巻が元気になれますようにと気持ちを込めて磨かせていただきました。どの先生方も一途に磨いているのですが、しつかりコミュニケーションをとっておられて、なんてうまく掃除をするのだと、感心するばかりでした。

その後も作業をいくつかさせていただいたのですが、途中にお話する機会があつたおばあさんがいました。にこにこしながら立つておられました。あいさつすると「ありがとうございます」と言ってくれました。そのおばあさん、なぜずっとここに立つておられるのかと気になって聞いたところ、おばあさんのお住まいのスペースが全面太陽の日差しをしつかり浴びていたのです。「あそこには暑いからこの時間はいつもこうしてるの。」と。その動くことが幸いしてか、肩を揉ませていただいても、まったく肩こりはありませんでした。す

ごく元気な方で、自分のパワーを送ろうとしたのがかえって感謝の気持ちと優しい笑顔と心に私の気持ちが癒されました。

最後に寄せ書きや千羽鶴を外す作業をしたのですが、そのおばあさんは千羽鶴だけはつるしておいてほしいと言っていました。おばあさんは、毎朝起きてすぐに目に入る色鮮やかな鶴にすぐく元気づけられるとおっしゃっていました。どの千羽鶴も様々な色でこしらえられており、見るだけで心が落ち着きます。こうしてずっとその場所にかかっていた鶴は半年も避難した皆さんの心を励まし続けていたんだと想うと、気持ちを込めたものを送るだけでも被災者の支援になるんだと気づかせていただきました。

夜には浅野さんの体験談を聞かせていただくことができました。その中には、今後私たち学生が、大阪にいなながらもできる支援を考えられるヒントもありました。また、私たちがどのような経緯で今この場所に來ているのかということも知れました。お忙しい中時間をいただき、たくさんのおつききをくださった浅野さん、本当にありがとうございました。そしてこのとき、「このようなことが起きる前から変わっていなければ、状況が変わっても同じままだ。」ということを教えていただき、私にボランティアをさせていただけの幸せを感じさせてくださいました。

翌日、私は牡鹿半島に向かいました。二回目にして初めて目の当たりにする津波で飲まれた町並み。山の木は腐り赤くなり、一面はあらゆるものの残骸で荒れた地になっていました。本当にここには町があったんだろうか。そう感じさせる景色が広がっていました。

私たちは今回大阪産業大学の野球部の皆さんと協力して総勢十名で一軒のお家の泥の書き出し作業をさせていただきました。しかしこの泥は津波によるものではありませんでした。それは二日前にきた台風の爪痕で、1M以上も水につかったお家だったのです。震災直後は津波で飲まれてしまった方々の支援をされていた方で、徐々に復興に向けて動き出せたときの台風です。

また自然が憎く感じました。

お家の前に着くやいなやおばあさんは涙を流しお礼を言ってくださいました。私たちはこの気持ちにこたえられるようにと気合が入りました。おにぎりやジュースを用意して下さったおばあさん。こんなに優しくしてくださいさるおばあさんに喜んでいただけるようにと、一生懸命させてくださいました。泥をめい一杯吸った畳は学生六人の力でも運ぶのに大変でした。一つずつ家のものを外に。すべて出し切った後には泥がしぶとく残っていました。その泥を泥かきでそいでいきました。きりがいいほどに溜まっていました。

そんなときに届いた一本のホース。そこからの綺麗になるスピードはすさまじいものでした。水で汚れた場所も、水がなければ美しくできない。許せないはずの水。でも、それとうまく付き合うことが早い復興を手に行うことができるのだと感じたとき、いつまでも過去にくよくよしては前には進めないのだということ、嫌になつたからと簡単に突き放してはいけないということに気づかせていただきました。

また気合のスイッチが入ります。玄関からキッチン、風呂場とトイレ。せめてここはピカピカにしなければ。自分に課題を与えました。ほかの場所を皆さんに任せ、数名で課題達成を目指しました。初めて床の模様が見えたとき、感動しました。もう住めなくなるのかと考えていた家が住めそうだと感じさせてくれたからです。そうすると、「あ、長靴を履いたままなんて失礼だ。」と感じて、気が付けば素手足で床を雑巾で拭いていました。6時間かけても家一軒完全にきれいにすることはできませんでしたが、全力でできたこと、また住めそう。と感じられたことが幸せでした。ほとんど復活した家を見たとき、そして鹿妻に戻って見た本来の体育館。私はこの二日間を通じて、石巻が確実に復興していることを実感しました。しかし、同時にまだまだ人手が必要であることも感じました。今回の活動は非常に学ぶ

ことも多かったのですが、これから私たちに何ができるかということも同時に問われているように感じました。私は今回でしばらく現地には行けなくなりますが、もう被災地ではなく「幸さい」が開けて来た「開幸地(ひさいち)」になった石巻をもっと幸せにできるように、今後も様々な活動に取り組んでいきたいと考えています。たくさんの気づきを本当にありがとうございます。